

井ノ上遺跡

2009

大分県教育庁埋蔵文化財センター

目 次

巻頭写真

序文

例言

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第3節 調査の体制	1

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の概要	5
第2節 井ノ上遺跡の堆積層	6
第3節 縄文時代早期の遺構	9
第4節 井ノ上遺跡の縄文時代早期の土器	11
第5節 縄文時代早期の石器類	17
第6節 弥生時代中期の遺構と遺物	49
第7節 その他の遺物	61

第4章 総括

第1節 縄文時代早期の土器	70
第2節 縄文時代早期の石器	70
第3節 縄文時代早期の井ノ上遺跡	70
第4節 弥生時代の中期の石器	71
第5節 弥生時代の中期の井ノ上遺跡	71

写真図版

報告書抄録

挿 図 目 次

第1図 井ノ上遺跡と周辺の遺跡	3
第2図 井ノ上遺跡の調査区配置図	4
第3図 井ノ上遺跡の堆積層	6
第4図 井ノ上遺跡の遺構・遺物分布図	7
第5図 井ノ上遺跡の集石・SK1・SK2の実測図	10
第6図 井ノ上 縄文早期遺物の実測図(1)	12
第7図 井ノ上 縄文早期遺物の実測図(2)	13
第8図 井ノ上 縄文早期遺物の実測図(3)	14
第9図 井ノ上 縄文早期遺物の実測図(4)	15
第10図 井ノ上 縄文早期遺物の実測図(5)	16
第11図 井ノ上 縄文早期遺物の実測図(6)	19
第12図 井ノ上 縄文早期遺物の実測図(7)	20
第13図 井ノ上 縄文早期遺物の実測図(8)	21
第14図 井ノ上 縄文早期遺物の実測図(9)	22
第15図 井ノ上 縄文早期遺物の実測図(10)	23
第16図 井ノ上 縄文早期遺物の実測図(11)	24

第17図	井ノ上 縄文早期遺物の実測図(12)	25
第18図	井ノ上 縄文早期遺物の実測図(14)	26
第19図	井ノ上 縄文早期遺物の実測図(15)	27
第20図	井ノ上 縄文早期遺物の実測図(16)	28
第21図	井ノ上 縄文早期遺物の実測図(17)	29
第22図	井ノ上 縄文早期遺物の実測図(18)	30
第23図	井ノ上 縄文早期遺物の実測図(19)	31
第24図	井ノ上 縄文早期遺物の実測図(20)	32
第25図	井ノ上 縄文早期遺物の実測図(21)	33
第26図	井ノ上 縄文早期遺物の実測図(22)	34
第27図	井ノ上 縄文早期遺物の実測図(23)	35
第28図	井ノ上 縄文早期遺物の実測図(24)	36
第29図	井ノ上 縄文早期遺物の実測図(25)	37
第30図	井ノ上 縄文早期遺物の実測図(26)	38
第31図	井ノ上 縄文早期遺物の実測図(27)	39
第32図	井ノ上 縄文早期遺物の実測図(28)	40
第33図	井ノ上 縄文早期遺物の実測図(29)	41
第34図	井ノ上 縄文早期遺物の実測図(30)	42
第35図	井ノ上 縄文早期遺物の実測図(31)	43
第36図	井ノ上 縄文早期遺物の実測図(32)	44
第37図	井ノ上 縄文早期遺物の実測図(33)	45
第38図	井ノ上 縄文早期遺物の実測図(34)	46
第39図	井ノ上 縄文早期遺物の実測図(35)	47
第40図	井ノ上 縄文早期遺物の実測図(36)	48
第41図	井ノ上 弥生中期SH1平断面実測図	50
第42図	井ノ上 弥生中期遺物の実測図(1)	51
第43図	井ノ上 弥生中期遺物の実測図(2)	52
第44図	井ノ上 弥生中期遺物の実測図(3)	53
第45図	井ノ上 弥生中期遺物の実測図(4)	54
第46図	井ノ上 弥生中期遺物の実測図(5)	55
第47図	井ノ上 弥生中期遺物の実測図(6)	56
第48図	井ノ上 弥生中期遺物の実測図(7)	57
第49図	井ノ上 弥生中期遺物の実測図(8)	58
第50図	井ノ上 弥生中期遺物の実測図(10)	59
第51図	井ノ上 弥生中期遺物の実測図(11)	60
第52図	井ノ上 弥生中期SH2平断面実測図	62
第53図	井ノ上 弥生中期SH2と周辺出土遺物実測図	62
第54図	井ノ上 試掘調査区実測図	63

表目次

遺物観察表	—土器—	64
遺物観察表	—石器類—	65
遺物観察表	—土器—	67
遺物観察表	—石器類—	67
遺物観察表	—土器—	69

序 文

本書は、大分県教育委員会が県道三重弥生線道路改良事業に伴い、土木建築部建設政策課の依頼を受けて実施した井ノ上遺跡の発掘調査報告書です。

遺跡のある佐伯市本匠は大分県の南部にあつて林業が発達した地域です。この地域には前高神社洞穴遺跡、堂の間遺跡、穴圀砦など縄文時代早期から中世にかけての遺跡が点在するなど古い歴史と文化をもつ地域です。

今回調査した井ノ上遺跡は、佐伯市を貫流する番匠川の上流域にある遺跡であり、遺跡からは縄文時代と弥生時代の遺構や遺物が検出され、番匠川上流に展開する集落の変遷を捉えることができました。

本書が、埋蔵文化財の保護に向けて、また地域の先人の生活を理解する資料として、さらには学術研究の一助として活用されれば幸いです。

終わりに、長期にわたる発掘調査に御支援、御協力をいただきました関係各位に衷心から感謝申し上げます。

平成20年3月31日

大分県教育庁埋蔵文化財センター

所 長 佐 藤 英 一

例 言

- 1 本書は、県道三重弥生線道路改良工事に伴い大分県土木建築部佐伯土木事務所の依頼を受けて、大分県教育委員会が発掘調査を実施した佐伯市本匠井ノ上遺跡の発掘調査報告書である。
 - 2 遺構の実測は調査担当者である綿貫俊一・谷尊祥が担当した。
 - 3 遺跡内の写真撮影は綿貫俊一が行なった。
 - 4 空中写真は株式会社九州航空に委託した。
 - 5 4級基準点測量は株式会社太陽コンサルタントに委託した。
 - 6 遺物の整理作業は、大分県教育庁埋蔵文化財センターで行なった。
 - 7 石器の実測図作成及びトレースは株式会社東海アナース（実測担当は荻幸二）に委託した。受託者が作図した素図を大分県教育庁埋蔵文化財で詳細に検査・校正を行ったうえで受託者に修正を指示し、受託者がトレースし、これを挿図として用いた。
 - 8 出土遺物と図面・写真は、大分県教育庁埋蔵文化財センターにおいて保管している。
 - 9 本書の編集・執筆は綿貫俊一が担当した
- 《凡 例》
- 10 本書にて用いた方位は真北である。
 - 11 石器や土器などの挿図は巻末の観察表に特徴を記した。なお挿図番号と観察表の項目の番号は同じである。



井ノ上遺跡空中遠景写真



井ノ上遺跡遺構写真

写真図版 目次

巻頭写真

井ノ上遺跡空中遠景写真

井ノ上遺跡遺構写真

図版1 遺構・遺物の出土状況 ー縄文時代ー…… 74

C4区の遺物出土状況

C5区の遺物出土状況

C5区集石の出土状態

SK2 検出状況及び断面

SK2 完掘状況

SK1 完掘状況

C5区付近の遺物・遺構の出土状況

B5区 埋型文土器出土状況(6図1)

図版2 遺構・遺物の出土状況 ー縄文時代ー…… 75

試掘調査南壁

土層堆積

試掘調査区全景(東から)

石鯰形磨石と石鏃の出土状況

遺物出土状態

礫器出土状態

磨石出土状態

図版3 遺構・遺物の出土状況 ー縄文時代ー…… 76

押型文土器 9図67

押型文土器 9図76

押型文土器 9図64

押型文土器 10図86

押型文土器 9図53 表

押型文土器 9図53 裏

押型文土器 9図74

押型文土器 10図88

押型文土器 9図56

押型文土器 8図22

押型文土器 10図78

押型文土器 8図35

押型文土器 6図2 表

押型文土器 6図2 裏

押型文土器 6図4 表

押型文土器 6図4 裏

押型文土器 8図48

押型文土器 9図73

押型文土器 8図38

押型文土器 10図82

押型文土器 10図90

押型文土器 9図50 表

押型文土器 9図50 裏

押型文土器 6図6 表

図版4 遺構・遺物の出土状況 ー縄文時代ー…… 77

押型文土器 6図6 裏

押型文土器 10図92 表

押型文土器 10図92 裏

押型文土器 9図71

押型文土器 10図80・79

押型文土器 7図13-1 表

押型文土器 7図13-1 裏

押型文土器 7図13-2

押型文土器 6図8 表

押型文土器 6図8 裏

押型文土器 9図65 表

押型文土器 9図65 裏

押型文土器 9図75

押型文土器 7図12

押捺糸文土器 10図89

押無紋土器 10図96

押型文土器 6図3

押型文土器 6図7

押型文土器 9図54 表

押型文土器 9図54 裏

図版5 遺構・遺物の出土状況 ー縄文時代ー…… 78

石鏃とトトロ石器

石鏃の未成品とスクレーパー類

図版6 遺構・遺物の出土状況 ー縄文時代ー…… 79

クサビ形石器・石槍・その他の剥片石器

礫器(204)

礫器(181)

礫器(182)

礫器(203)

礫器(なし)

礫器(185)

図版7 遺構・遺物の出土状況 ー縄文時代ー…… 80

石核(石材・チャート)(211)

礫器(195)

礫器(202)

礫器(311)

礫器(188)

割石(210)

礫器(200)

礫器(199)

図版8 遺構・遺物の出土状況 ー縄文時代ー…… 81

割石(186)

割石(209)

石鯰形磨石(表面,157)

石鯰形磨石(側面,157)

凹石(172)
敲石(162)
礫器(201)
敲石(168)

図版9 遺構・遺物の出土状況 -縄文時代- …… 82

敲石(170)
敲石(165)
敲石(164)
敲石(177)
礫器(184)
敲石(150)

図版10 遺構・遺物の出土状況 -弥生時代- …… 83

SH1 完掘状況
SH1 遺物出土状況

図版11 遺物写真 -弥生時代- …… 84

SH1 出土の壺(42図215)
SH1 出土の高杯(42図223)
SH1 出土の台石(50図308)
SH1 出土の壺(42図210)
SH1 出土の壺(42図218)
SH1 出土の甕(42図221)
SH1 出土の甕(42図231)
SH1 出土の甕(42図230)
SH1 出土の甕(42図229)
SH1 出土の甕(42図226)
SH1 出土の甕(42図232)

図版12 遺物写真 -弥生時代- …… 85

SH1から出土した磨製石鏃とその未成品
SH1から出土した磨製石鏃の未成品

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

大分県では全国的な趨勢である過疎化の波をくい止め、企業誘致を図るためその打開策として交通体系整備を最重点課題としてあげ、道路の整備に力を入れている。今回の発掘の原因となった県道三重弥生線は、豊後大野市の中心に変貌しつつある三重町中心部と佐伯市弥生を結ぶものであるが、区間の本匠地区は狭小な谷間の区間で、離合ができない箇所が多い県道であった。

大分県埋蔵文化財センターでは、埋蔵文化財の保護と円滑な実施を目的として、県土木建築部所管の全事業について埋蔵文化財の有無を事前に調査している。本事業は、平成10年度県土木建築部実施予定事業の協議が当時の土木建築部企画検査室から大分県教育委員会文化課にあった。ところが「遺物が分布している」との通報がり、平成11年2月に確認調査を行なった結果、遺物・遺構が無かったので工事着工に問題はなかった。大分県教育委員会文化課では平成17年6月に確認調査を行った結果、黒土層中から縄文時代早期の遺物が確認された。

第2節 調査の経過

確認調査によって縄文時代の遺構・遺物の存在が確認されたため、関係部局との協議の結果、遺跡の本調査が必要となった。土木建築部佐伯土木事務所からの調査依頼を受けた大分県教育委員会文化課は大分県教育庁埋蔵文化財センターへの調査依頼を行った。大分県教育庁埋蔵文化財センターでは平成17年9月1日から本調査を開始し、同年11月4日に終了した。

第3節 調査の体制

(平成18年度)

埋蔵文化財センター	所	長	渋谷忠章
		次長兼総務課長	
	調査第1課長		栗田勝弘
	調査第1課一般事業班	副主幹	綿貫俊一
	同	嘱託	谷尊祥

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

佐伯市は大分県の南部地域を占めるが、その大半が中央構造線を構成する山地地形である。遺跡のある佐伯市本匠地域も例外ではなく、周囲を標高300～500m級の山々が連なる。本匠地域は佐伯市の中では北部地域にあたり、北側を豊後大野市や臼杵市と接している。こうした山地が連なる佐伯市本匠の中央部を番匠川が東流しており、川の両側に若干の平地が形成され、集落が営まれる。遺跡が位置するのは佐伯市本匠大字因尾字上の原に所在する。ここは川が大きく蛇行した内側(右岸)に形成された舌状河岸段丘である。この蛇行部分は逆U字形を呈する。川の水面からの比高差が約24m。北面する地形であり対面と背後は山地であり、眺望あまりよくない。この辺りは石灰岩を含む山塊が多く、各所で露頭がみられ、鍾乳洞を幾つも見かける。また上流の堂の間では大雨の時を除き川に水が流れない特殊な地下環境を形成している。これは石灰岩地帯の為、地下に地下川道できており、通常はそこを流れ、井ノ上遺跡付近で再び川が流れ出すようになっている。以上のように一帯は山塊に囲まれ、水量が多いために霧が極めて多く、因尾茶の生産に適しているとされる。

第2節 歴史的環境

井ノ上遺跡のある谷間には幾つかの遺跡が存在している。旧石器時代遺跡の存在は詳らかではないが、因尾砦(囲ヶ岳洞穴)からはかつて化石化した獣骨や石器の出土が報じられたことがある。一体は石灰岩地帯であり、人類化石の発見が期待される地域であることもあって、囲ヶ岳洞穴・前高洞穴・聖嶽洞窟などの洞穴が調査された経緯がある。

遺跡の北側を東流する番匠川のやや上流の川縁(左岸)に前高神社がある。前高神社の北側背後には石灰岩の懸崖が露出しており、古い鍾乳洞が形成されている。この鍾乳洞の開口部から、縄文時代早期の押型紋土器に伴う縄文土器や獣骨・貝殻が発掘されたほか、縄文時代後期、弥生時代早期の遺物が発掘され、前高洞穴遺跡と呼ばれている。

番匠川を更に遡ると堂ノ間という地区になる。ここは番匠川上流地域のなかで最も平地が発達したところである。ここに堂ノ間遺跡があつて縄文時代前期の土器や石器が夥しく出土している。堂ノ間遺跡の土器は轟式土器という縄文時代前期初頭に九州全域に広がった土器である。また石器類に狩猟用の石族が多量に出土しているが、それらの石器の石材には姫島産黒曜石を材料にしていた。また堂ノ間遺跡からは弥生時代・古墳時代の竪穴式住居址や中世の掘っ立て式住居が見つまっている。奈良時代・平安時代の番匠川流域の様子ははっきりしない。この他、井ノ上遺跡に近い井ノ上岩陰でも縄文時代の土器片が出ている。

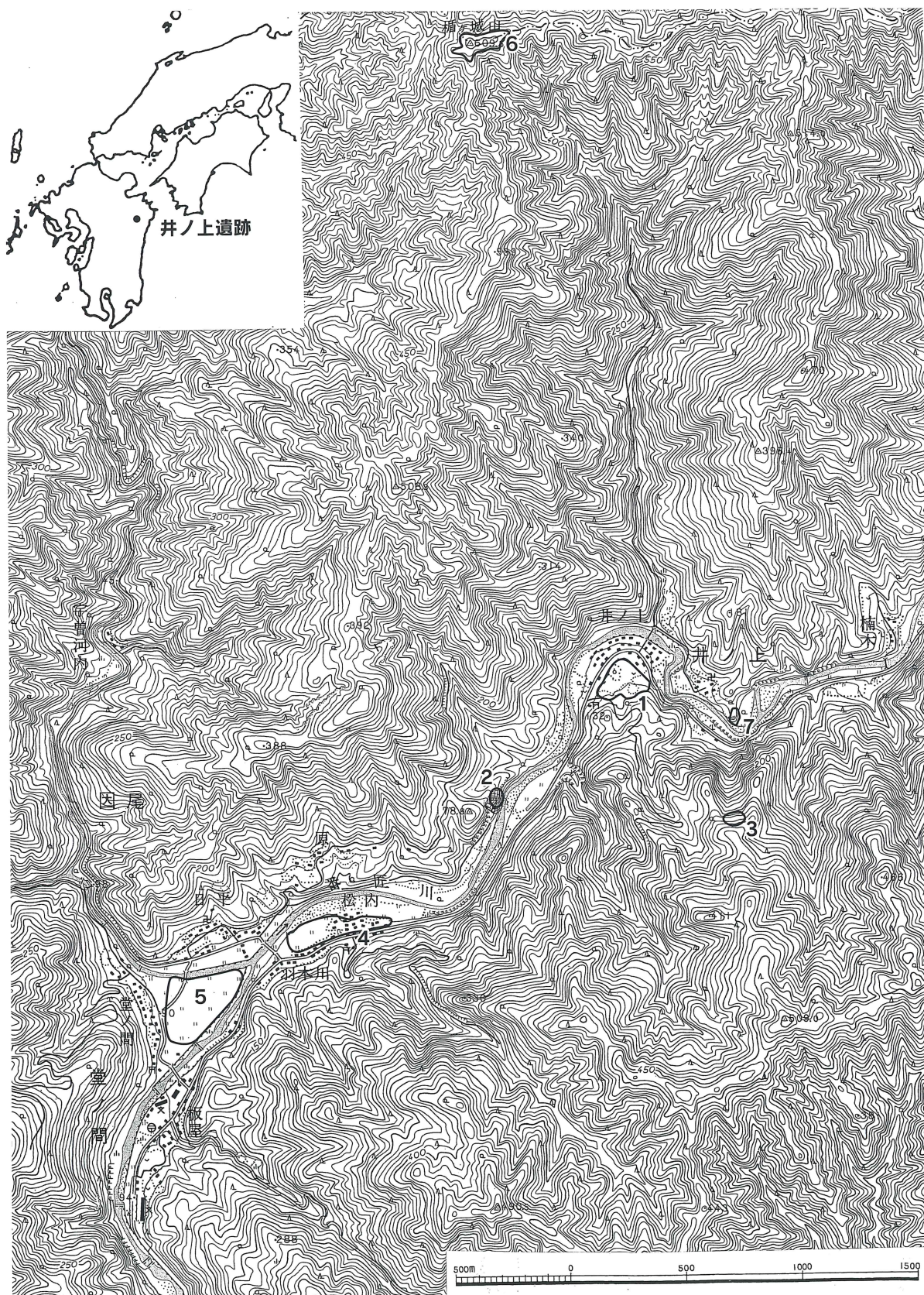
番匠川の上流地域が歴史的にはっきりしてくるのは中世になってからと推定する。中世のこの地域を支配したのは佐伯氏の家来であつた「柳井氏」といわれており、野史や古文書に登場している。柳井左馬介が豊薩戦の際、穴囲砦(因尾砦跡・囲ヶ岳洞穴)に立て籠もり撃退したのが前述した囲ヶ岳洞穴とされている。囲ヶ岳洞穴は間口・奥行きとも約20m前後の狭小な洞穴であるが、真に険しい懸崖上に立地しており、薩摩の武士を撃退したことを偲ばせる。柳井氏の居館跡は堂ノ間の北方の山間にあるとされている。

番匠川を下ると佐伯市弥生の広い沖積平野となる。この地域の小倉の崖面には古墳時代に造営された横穴墓がある。おそらくこの平野部に居住し農耕を営んでいた人々の墓地であろう。このほか弥生地区には縄文時代・弥生時代・奈良時代・平安時代の痕跡は明確ではない。しかし中世になると弥生地区東部の山上には中世佐伯氏の詰城である柵牟礼城や支城の小田山砦跡がある。ここには切岸・縦掘・掘切と呼ばれる防御施設が残っている。また小倉地区にある古墳時代の横穴がある近くの崖面には鎌倉時代から室町時代にかけての磨崖石塔が造営されているが、造営当時の在地領主であつた佐伯氏一族の名前が刻まれている。

佐伯市本匠地区の南側山地を越えた場所にあるのが佐伯市直川である。ここには源六原遺跡や神ノ原遺跡

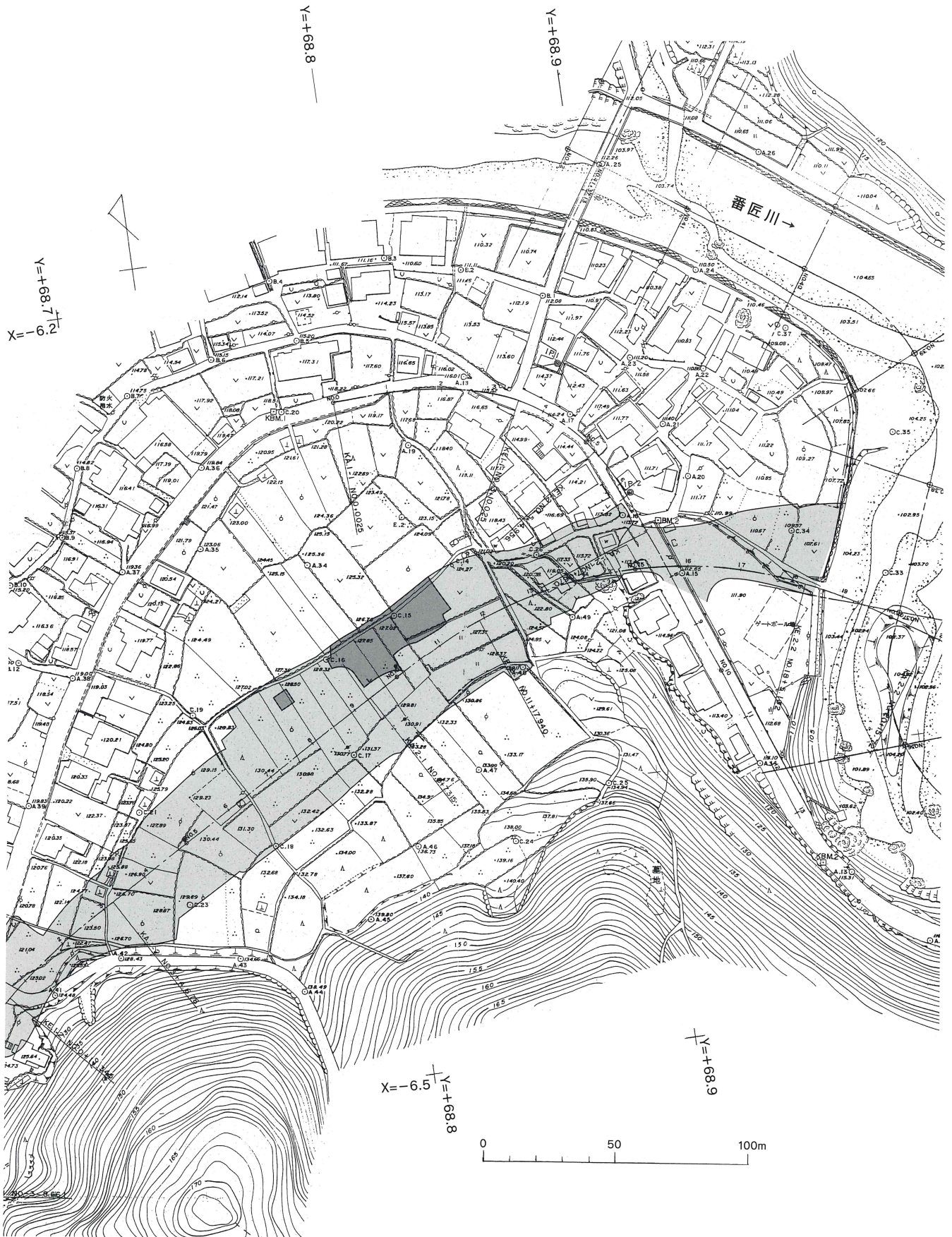
が発掘されており、古い遺物が出ている。両遺跡からは縄文時代早期の無紋土器や押型文土器が多量に出ているだけでなく、集石もでている。石器類はチャートを石材とした例が多い。神ノ原遺跡では所属時期が確定していないが、縄文時代草創期に多い有茎尖頭器が出土している。

また源六原遺跡で弥生時代中期の住居址が多く出土している。



第1図 井ノ上遺跡と周辺の遺跡

- 1.井ノ上遺跡 2.前高洞穴 3.因尾砦跡 4.羽木川遺跡 5.堂ノ間遺跡 6.桶ヶ城跡 7.井ノ上岩陰



第2図 井ノ上遺跡の調査区配置図
 ※薄い網掛けが道路路線、濃い網掛けが調査区

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の概要

1 遺構の分布

井ノ上遺跡から出土した遺物から遺構の所属時期は縄文時代早期と弥生時代中期にほぼ限定される。東西に長い調査区からは縄文時代早期の遺構として配石・集石と土坑が出土している(第4図)。

配石は10cm以上30cmまでの大きな石を1個または数個配置している。全体的には20cm以上の石が多い。配石の表面は受熱によって部分的に赤化した例もあるが、そうでない例が多い。配石に観察される受熱痕跡は本来の用途とは違って二次的に受熱した可能性が高い。配石は調査区の西側・東側と南側の一部を除く部分において散漫に分布している。これは西側が弥生時代の住居址を調査のために早期遺物の包含層に達しなかったことに原因があり、東側は包含層が削平されていたことに原因がある。南側の一部は若干包含層の掘り下げがたりなかったことに原因がある。散漫な分布を示す配石であるが、E6区・G6区・G7区・D5区・E5区付近にやや個数が多い傾向が観察される配石には摩滅痕・打痕が観察されないため、調理にかかわる遺構の可能性は低い。やや個数の多い地区の存在から配石の重量を生かした住居の区画石や屋根材の固定等の意味も想定される。

集石はC5区の西半部に一基位置するが、他に明確な集石は観察されない。ただし調査区のほぼ全域にわたって受熱し、受熱により赤化した小破碎礫が分布しており、集石を利用した推定調理活動が広範囲に行われた形跡がある。こうした小破碎礫の分布は、集石の利用、取り出しによる破壊、礫の再利用が繰り返されたことを物語っている。

土坑はD5区とE4区に長軸を南北方向に向けるように二基存在する。このうちE4区の例は陥穴と考える。

このほか弥生時代中期の住居址がD6区・E6区付近を中心に位置するSH1とE10区を中心に位置するSH2がある。弥生時代の遺構は二基の住居址以外にはなく、分布密度は低い。

2 遺物の分布

弥生時代中期の住居址から出土した遺物と極僅かな縄文時代後・晩期資料を除けば、ほぼ全てが縄文時代早期に帰属する遺物である。縄文時代早期の遺物は基本的に土器と石器であり、他の遺物はない。これらの土器と石器は調査区の西側・東側と南側の一部を除く部分に分布しており、西側は弥生時代の住居址を調査のために早期遺物の包含層に達しなかったことに原因があり、東側は包含層が削平されていたことに原因がある。南側の一部は若干包含層の掘り下げがたりなかったことに原因ある可能性が高い。当然ながら礫や配石の分布状況と同様である。なお、背後の南側山塊にチャートを含む層が存在しているようで、ここから流れ出た岸錐堆積が、調査の南よりにみられ、石器類との区別が困難である。

遺物類の大まかな分布傾向としては調査区の東半部にチップ、剥片、石器類土器が集中する状況がある。おそらく生活の中心がそのあたりにあったのだろう。調査区の南西部に試掘トレンチを設定し、掘り下げたところ、配石や若干の遺物が観察された。

第2節 井ノ上遺跡の堆積層

井ノ上遺跡のD8区の北壁を部分的に精査し、観察した。

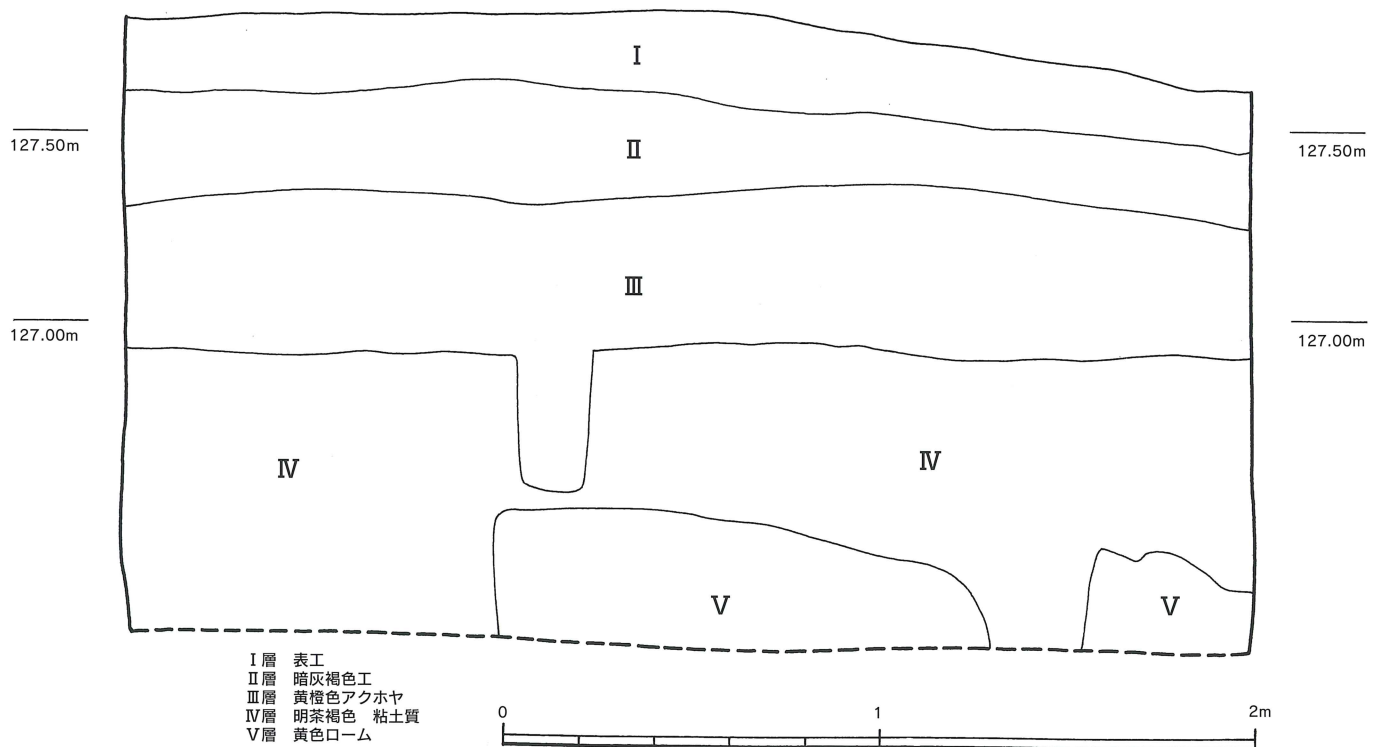
I層 暗灰色 耕作土で厚さ20cm前後。

II層 暗灰褐色 粒子が細かい。厚さ20cm～30cm前後。

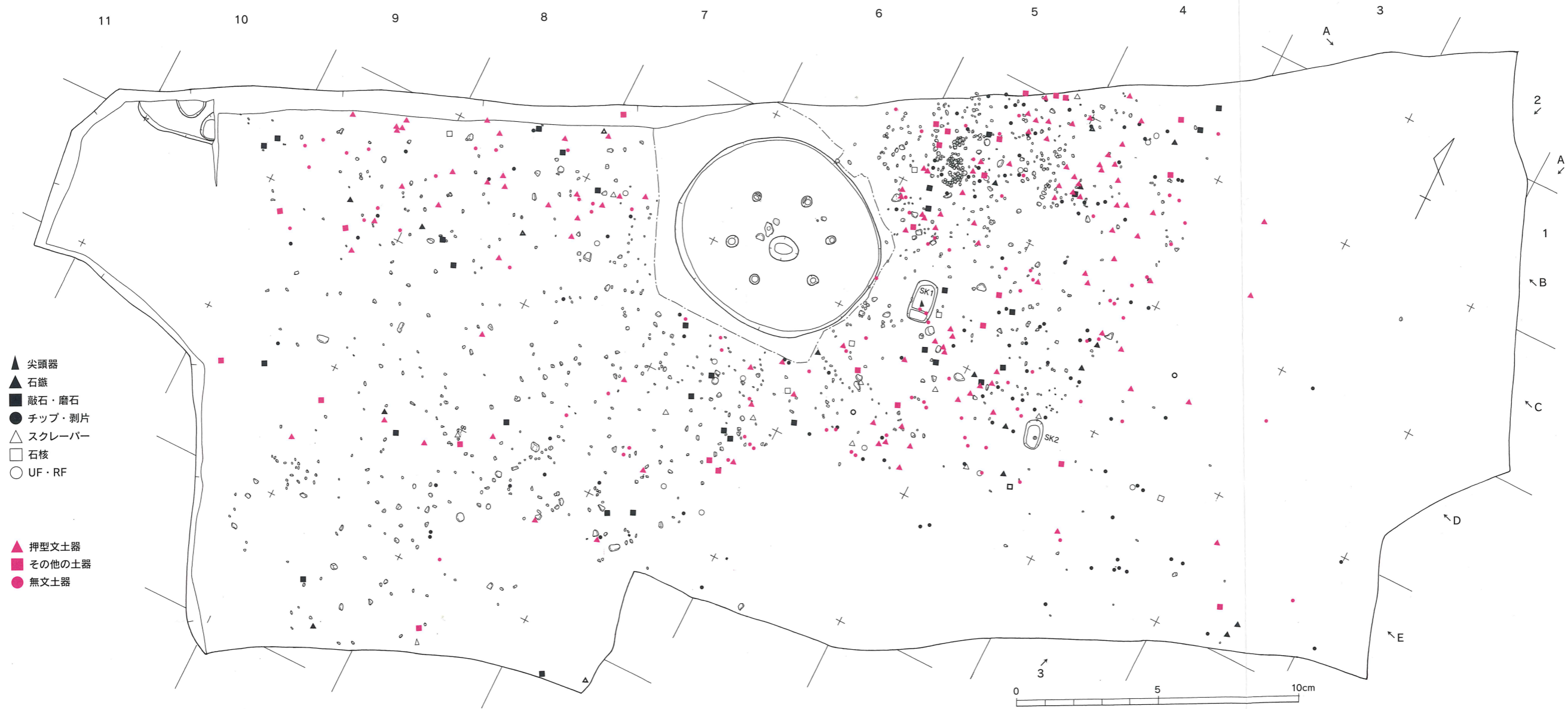
III層 黄橙色 Ah(アカホヤ)で、粒子が細かくガラス分が多い。厚さ40cm前後。

IV層 明茶褐色 粘土質。厚さ60cm～100cm。

弥生時代の住居址はIII層の上面で掘り込みが観察される。縄文時代早期の遺物はIII層の中位付近から出始める。またIV層の下部からV層以下の層には後背地からの混入を窺わせる崖錐堆積物である大小の礫を多く含む。



第3図 井ノ上遺跡の堆積層 (試掘調査区南壁)



※不定形白抜き輪かくは礫や配石
 ※C5区の密集部分が集石
 ※住居址土杭 (SK1, SK2) 以外は、ほぼ全て縄文時代早期の遺物である。

第4図 井ノ上遺跡の遺構・遺物分布図

第3節 縄文時代早期の遺構

1 集石1

冒頭で記したように井ノ上遺跡の集石は一基しか見つかっていない。ところが調査区内には夥しい焼礫の破片が散在していた。おそらく時期を微妙に違えて集石を構築し、食料品等の被熱加工対象物を加工後、中のもを取りだした後はそのまま放棄したのだろう。そして再び石を再利用する過程のなかで結果的に破壊され、散在したのであろう。一基しか存在しない理由は、井ノ上遺跡での居住が終了した後、付近での居住はなかった可能性もある。

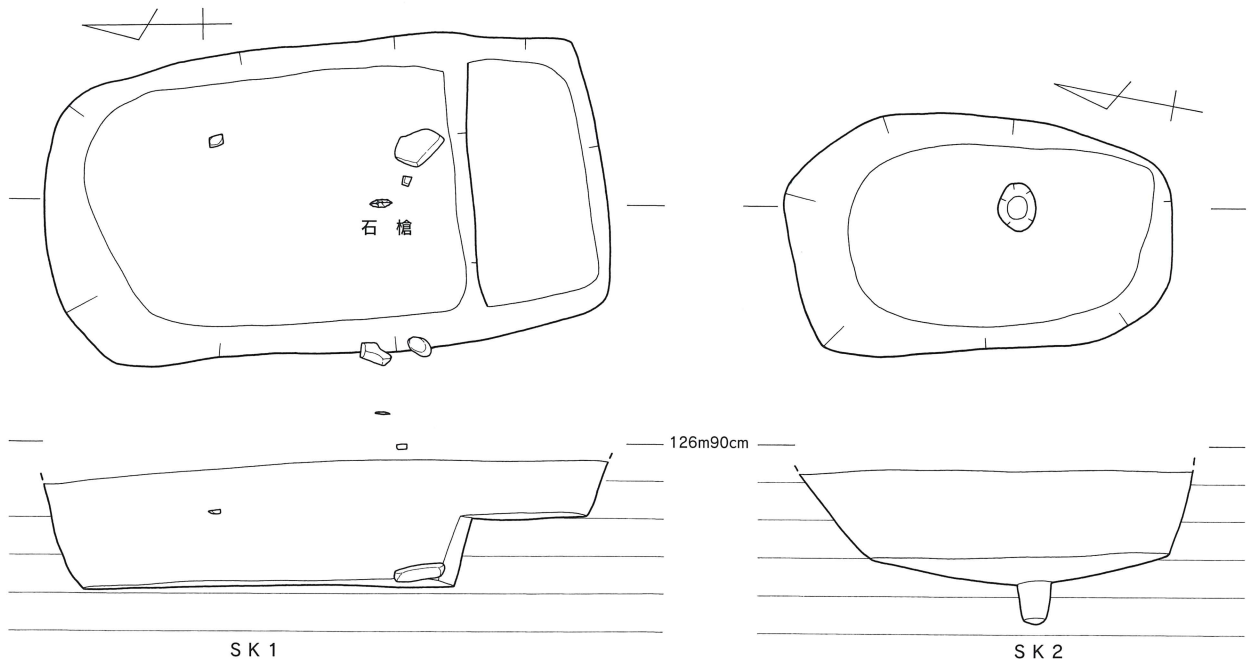
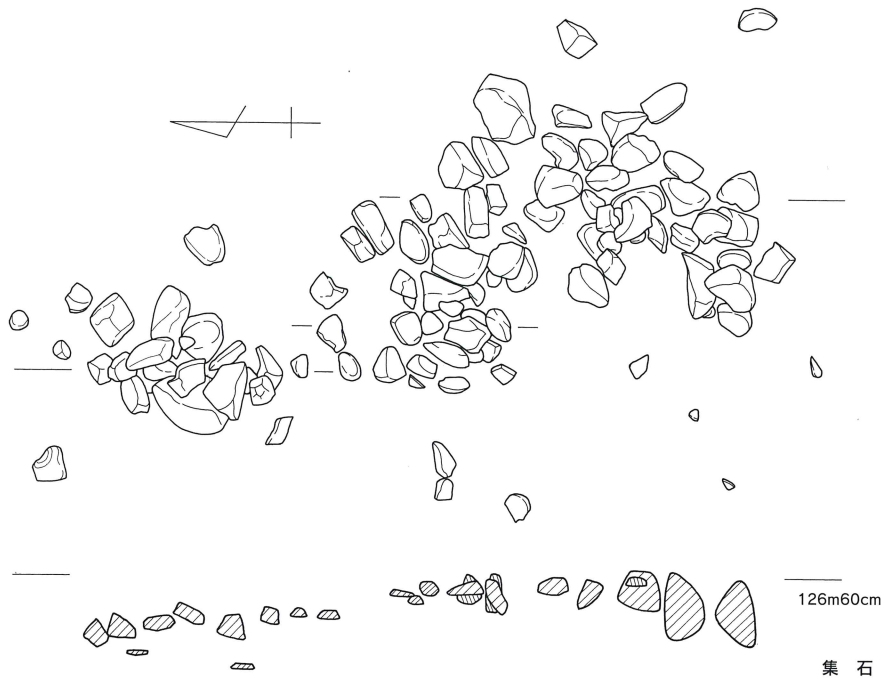
集石1(第5図上段) C5区の東南に位置する(第4図)。集石1の南東側にはSH1が位置する。この辺りは礫が多く、Ⅲ層下部付近から掘り下げたところで検出した。礫は拳大前後の大きさを有する例が多い。詳しく観察すると集石1は三つの単位から成り立っており、南北方向に隣接しながら連続しているようにみえる。いずれも礫の密集度は高いが、著しく礫を積み重ねた状況でもない。礫は概算でおよそ94個あり、いずれも受熱して破碎礫となっている。集石の下位に明確な掘り込みは観察されなかった。

2 SK1

SK2はD5区でSH1の東側に長軸を南北方向に向けるように位置する(第4図)。土坑は僅かに残存していた包含層を下げ、ローム層上面で精査した段階で検出した。土坑の規模は、長軸150cm、短軸83cm、深さ35cmである(第5図下段左側)。内部の土はⅣ層の土と大差ない。内部の南に幅30cmの小さい段がある。土坑内にⅢ層の主要土であるアカホヤが含まれている状況がなかったことからすれば、土坑の所属時期を縄文時代早期と押さえると陥穴ではない可能性が高い。内部に礫や遺物見られたが、土坑との関連は明確ではない。

3 SK2

SK1はE4区の北半に長軸を南北方向に向けるように位置する(第4図)。土坑は僅かに残存していた包含層を下げ、ローム層上面で精査した段階で検出した。土坑の規模は、長軸103cm、短軸64cm、深さ30cmである(第5図下段右側)。内部の土はⅣ層の土と大差ない。底部で東壁よりに直径9cm、深さ12cmの小さい穴があり、調査段階では陥穴の逆茂木痕であると考えた。その際、土坑が浅いことの原因は後世に上面が削平されたことにある。遺物分布図を見て分かるように土坑の周辺に遺物が少ないのは、縄文時代早期の包含層であるⅣ層がかなり削平を受けていたことが主な理由である。しかしⅣ層が完全に削平されているわけではなく、土坑が縄文時代早期に由来するものであれば削平を受けた可能性は低く、陥穴ではない可能性が高い。陥穴とすれば、縄文時代早期ではなく、Ⅲ層の上位層から掘り込まれたことになる。しかしこの辺りの地層堆積は元々薄く、仮に土坑の掘り込みがⅡ層の上面からとしても深さ150cmに足りない。また土坑内にⅢ層の主要土であるアカホヤが含まれている状況がなかったことからすれば、土坑の所属時期を縄文時代早期と押さえると陥穴ではない可能性が高い。



第5図 井ノ上遺跡の集石・SK 1・SK 2の実測図

第4節 井ノ上遺跡の縄文時代早期の土器

ここで報告する遺物は基本的にⅢ層下半からⅣ層にかけて出土しており、縄文時代早期に属する遺物である。

1 押型文土器—楕円文—

A類 尖底部から外方へ開き気味に立ち上がり、口縁部が緩く外反する器壁の厚い土器である。外面には大きい楕円文、内面にはヘラや二枚貝による柵状文を斜行するように施した土器(第6図1,6~10,第8図24)。こうした特徴は田村式土器の特徴である。1は全体の大半が残った土器で、内面の器面調整は横方向の条痕である。

B類 外面に楕円文、内面はナデによる調整のみで楕円文や柵状文はない。尖底部から外方へ開き気味に立ち上がる例と(第6図2・3)、上半で直口気味に立ち上がる例がある(第6図4・5)。口縁部はあまり外反しない土器で、器壁の厚い土器と薄い土器がある。田村式土器に伴う土器である。

C類 口縁部だけであり、底部形態は明確ではない。外方へ開き気味に立ち上がり、口縁部が短く外反する器壁の厚い土器である(第7図13)。外面には縦方向回転施紋の楕円文、内面の口縁部に幅の狭い楕円文原帯を回転施紋する。本例も田村式土器に伴う土器である。

この他、胴部に楕円文が残る例があるが、これらも田村式土器に伴う土器であろう(第8図25~第9図49,同51)。

以上楕円文について説明を加えたが、概ね早水台式土器に該当する例はなく、田村式土器以降に位置づけられる土器である。

2 押型文土器—山形文—

D1類 口縁部だけであり、底部形態は明確ではない。内外面に横走する細い山形文を施し、内面口縁端部を短い柵状文によって斜行(外傾)させた土器(第9図55,第10図79~81,83,84)。こうした土器は早水台式土器に該当する。

D2類 口縁部だけであり、底部形態は明確ではない。内外面に横走する細い山形文を施し、口縁内面にD1類よりは長い柵状文を施した土器(第9図53・54)。こうした土器は早水台式土器に該当する。この他、胴部の文様が連珠状の山形文があり、早水台式土器に伴うのであろう(第9図75,77)。

E類 口縁部だけであり、底部形態は明確ではない。外面には横方向回転施紋の山形文、内面の口縁部よりに山形文を回転施紋する土器(第9図64・65)。こうした土器は稲荷山式土器に該当するか。

F類 山形文を縦方向に施紋した土器があり、下菅生B式土器以降に位置づけられよう(第10図85~88)。

3 撚糸文土器

撚糸文は数が少なく、二例のみである。

G類 一例は網目状の撚糸文土器(第10図89)。

H類 もう一例は縄をよった撚糸文土器である(第10図90)。

4 無紋土器

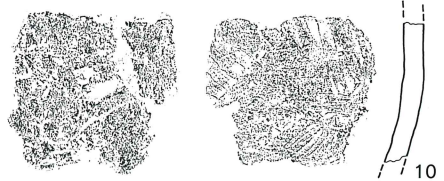
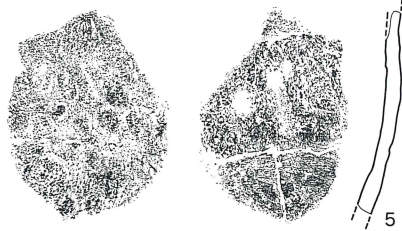
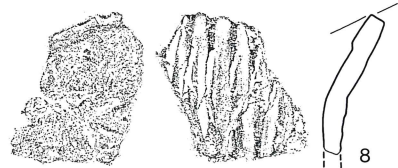
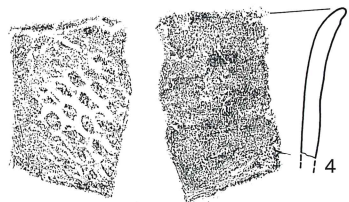
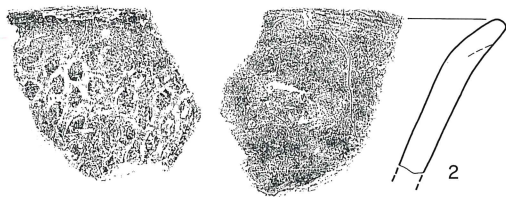
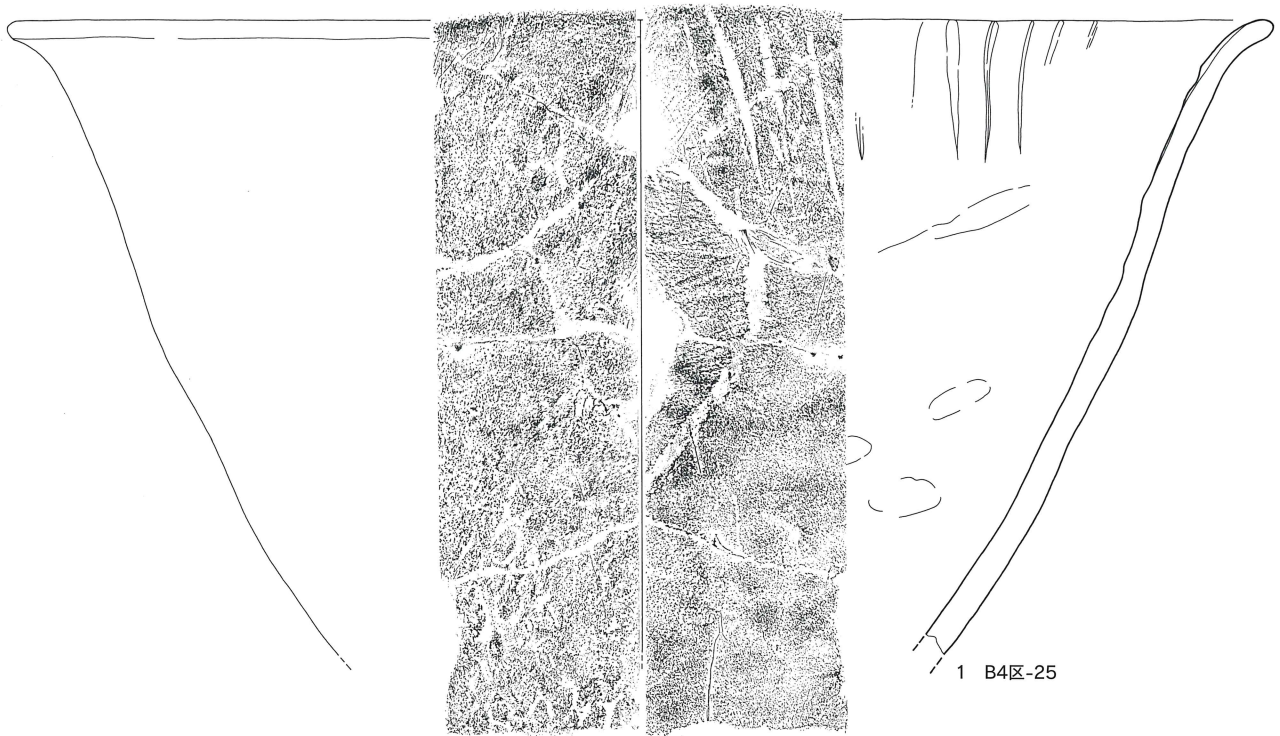
I類 他遺跡の類例から、尖底で上半部に最大幅があり、口縁部が内湾する(第10図92)。調整はナデ。

J類 直口する土器(第10図95・96)。調整はナデ。

K類 胴部が屈曲し、外方へ開き気味に立ち上がる土器(第10図98)。調整はナデ。

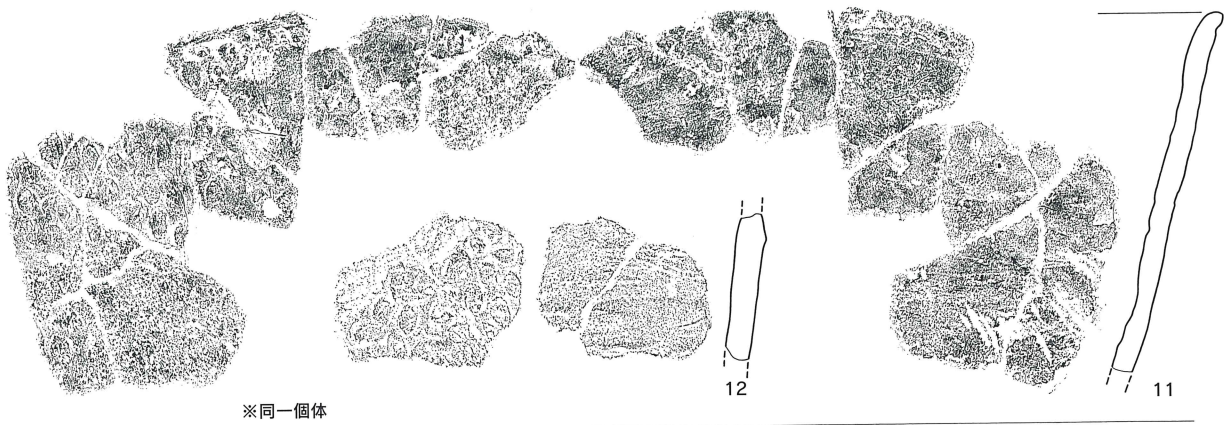
L類 外方へ開き気味に立ち上がり、口縁端部が逆「く」字状となり、口縁内面は柵状文風にヘラで上から下へ沈線を加えた土器(第10図94)。調整はナデ。

M類 外面に条痕調整を加えた土器(第10図97)

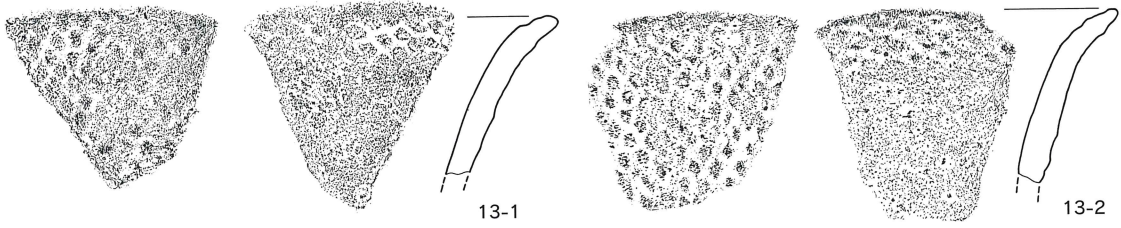


0 5 10cm

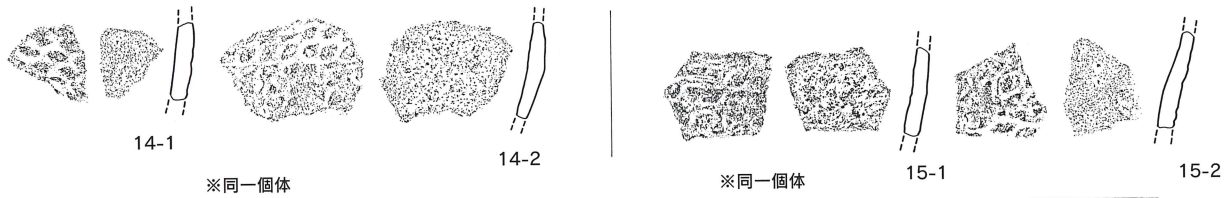
第6図 井ノ上 縄文早期遺物の実測図(1)



※同一個体

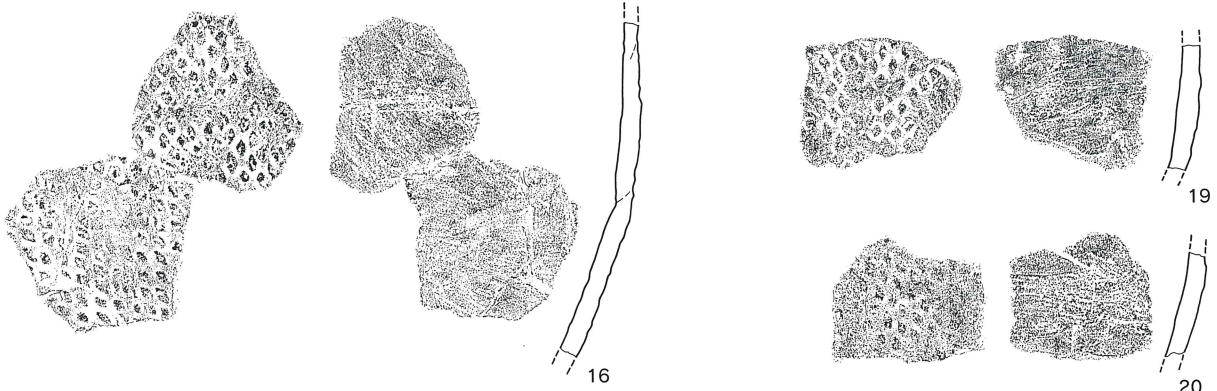


※同一個体



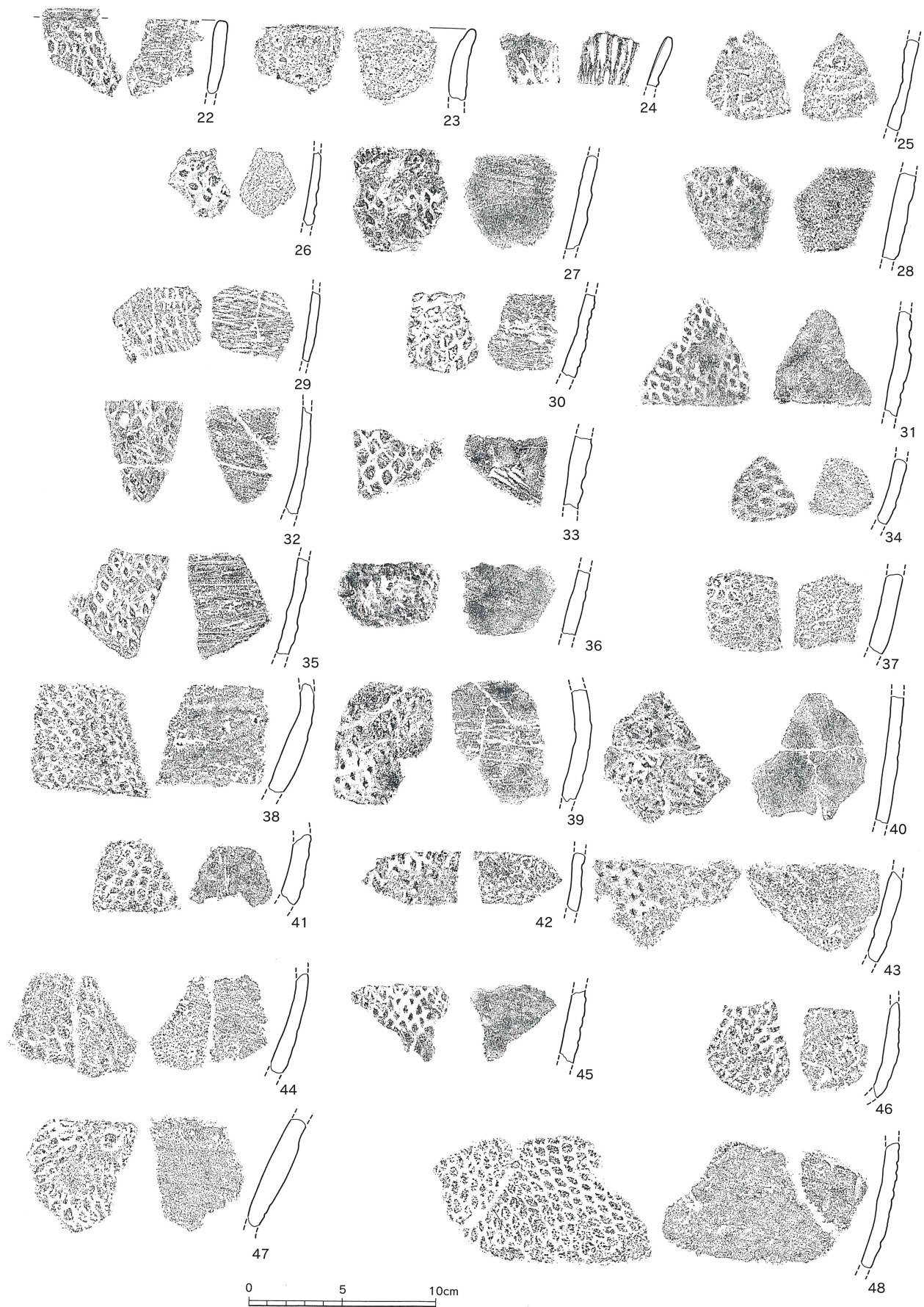
※同一個体

※同一個体

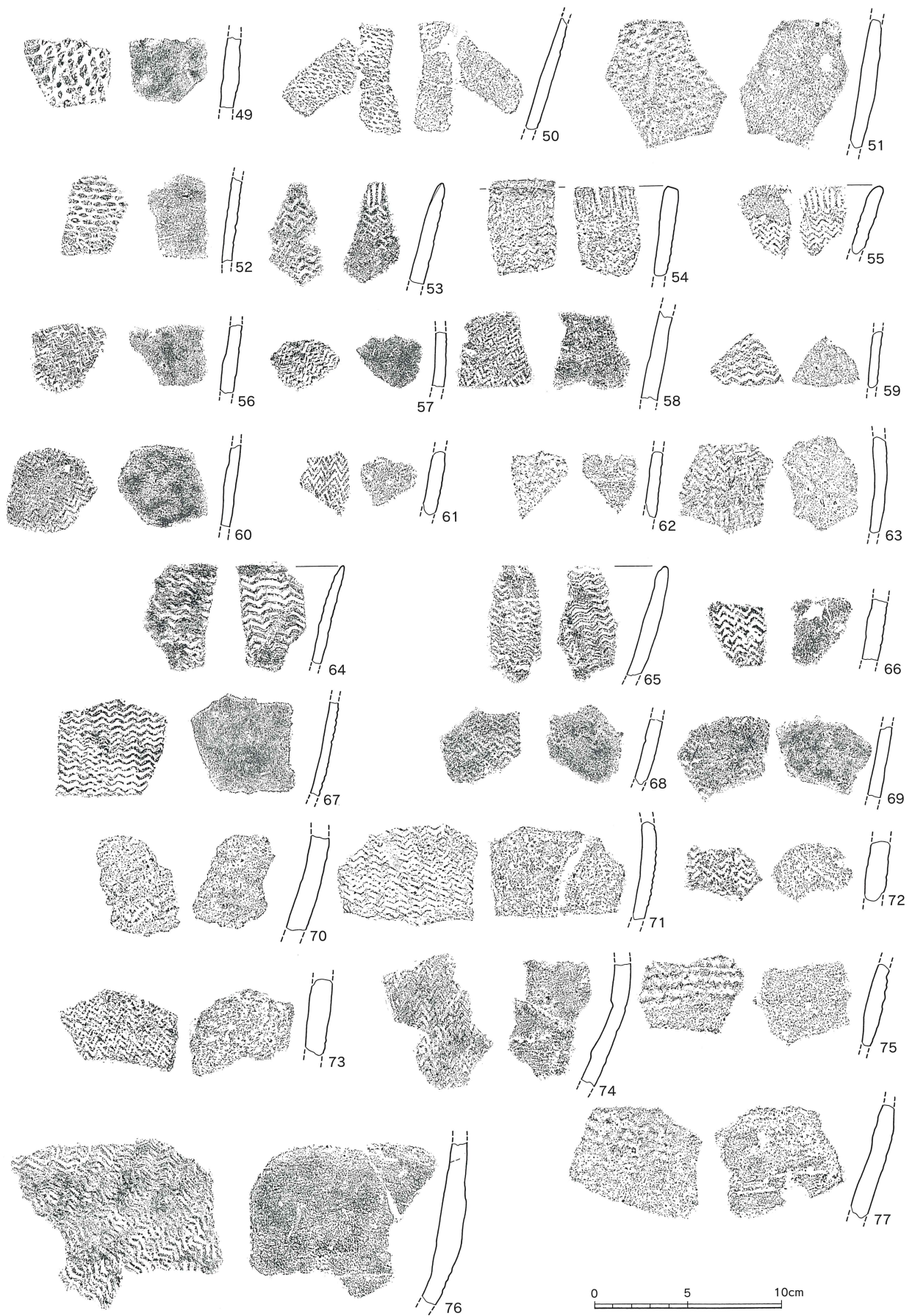


※同一個体

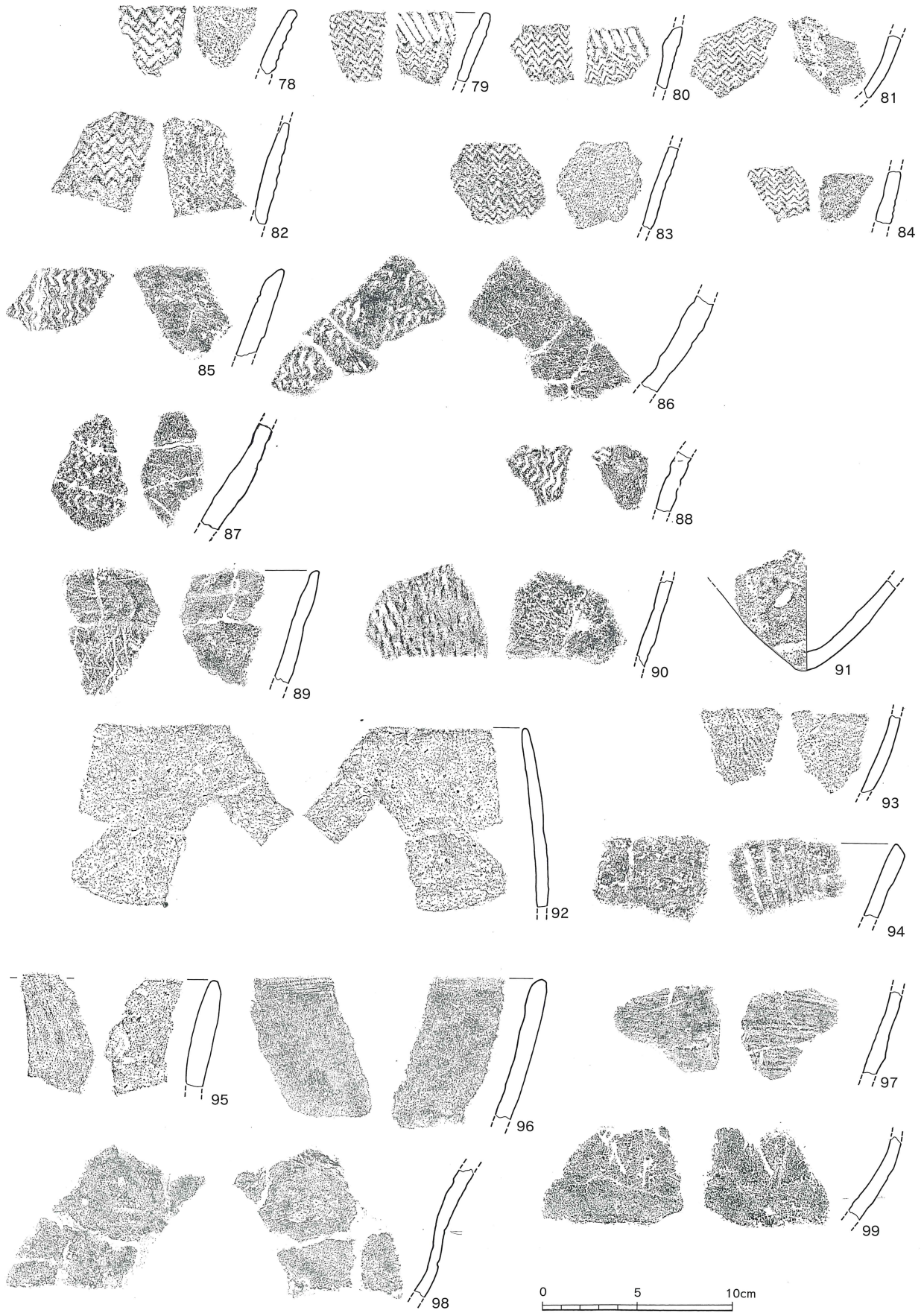
第7図 井ノ上 縄文早期遺物の実測図(2)



第8図 井ノ上 縄文早期遺物の実測図(3)



第9図 井ノ上 縄文早期遺物の実測図(4)



第10図 井ノ上 縄文早期遺物の実測図(5)

第5節 縄文時代早期の石器類

1 石鏃

井ノ上遺跡の調査区から出土した石鏃は35点で、うち15点が石鏃の成品として製作された完全品や使用による破損品と考えられる例である(第11図101~115)。残りが石鏃の未成品である(第12図116~125, 第13図127)。幾つかの形に分類できる。

- A 1 基部の抉りが浅い二等辺三角形の抉りをいれ、脚端部が尖る形態(第11図101)
- A 2 基部の抉りが浅い二等辺三角形の抉りをいれ、脚端部がやや丸い形態(第11図103)
- B 2 基部の抉りが深い二等辺三角形の抉りをいれ、脚端部が尖る形態(第11図102)
- C 基部の抉りが深いアーチ型の抉りをいれ、脚端部が幅広い形態(第11図104~第11図115)

以上のうちC類は縄文時代早期の鏃形石鏃に該当するものであり、A1~B2類も出土土器の状況から概ね縄文時代早期と考えてよいのだろう。石鏃の成品として製作された完全品や使用による破損品と考えられる例である(第11図101~115)。

石鏃の未成品には成品までの各段階を示しているが、共通するのは三角形を基調とした形態から、抉りを入れ整形していく過程が推定できる。こうした未成品は早水台の報告のように従来は「尖頭状石器」と分類されてきたものである。これらは加工自体が粗く、縁の平面観の出入りが多い。

石鏃の成品・未成品の石材については次のとおりである。硅質頁岩1点、サヌカイト1点、チャート24点、姫島産黒曜石6点であり、周辺地域産と推定されるチャートが最も多い利用率である。

2 トロトロ石器

上端部が半円形で、脚端部の平面形が玉縁状に幅広である(第11図100)。器面は名称のとおり「トロトロ」である。本例は器長と器幅がほぼ同じ小型例である。他のトロトロ石器と同様に用いた石材はチャートであり、青と白の横方向の縞が観察される。

3 石槍(両面調整尖頭器)

平面形態は木葉形で、横断面形はほぼ凸レンズ状を呈する(第13図126)。上下両端が尖るが、下端はやや丸みを有する。表面側と裏面の左半部を貝殻状の剥離で調整している。裏面側左半部の調整は素材の打面部側であり、打面部及びポジ面の打瘤を除去するための調整剥離であろう。また残ったポジ面の方向から幅広剥片を素材としている。石材はサヌカイトである。

4 スクレーパー

井ノ上遺跡の調査区から出土したスクレーパーは10点ある。うちスクレーパーに用いた石材の内訳はチャートが5点、硅質頁岩が1点、サヌカイトが1点、姫島産黒曜石が1点である。スクレーパーは幾つかの形に分類できるが、定式化したものはない。拇指状に平面形態を整えた搔器(第13図127)。不定形剥片を切断し、側縁部を鋸歯状に加工した例(第13図129)、平面形をD字形に急角度の整形加工を加えた例(第13図130)。小型の縦長剥片を用い、端部を細かい加工によって水平の刃部を作り出した撥形のスクレーパー(第13図128)である。この他、サヌカイトの板状剥片から石理方向に幅広剥片を割取った剥片を素材として、裏面側端部の縁に沿って細かい剥離を加えて刃部とした例(第14図137)がある。

5 楔形石器

井ノ上遺跡の調査区から出土した楔形石器は5点ある。楔形石器は上下両端方向からの剥離痕がある例で(第14図134, 136, 138~140)、うち最も典型的な例(A群)は2点であり(第14図136, 138)、他は加工痕ある石器と分類するべきか。後者の3点は片側の面に直交する方向から入念な調整を長軸に施す(B群)。この他、楔形石器の未成品もしくはその形成過程と考える石器がある(C群、第14図135)。この例は表面側が長軸に直交する方向からの剥離痕、裏面側に長軸方向の両端から剥離痕が延びている。楔形石器に用いた石材の内訳はチャートが4点、姫島産黒曜石が1点である。形態と剥離痕の類似性から、C群とB群、B群とA群が似ていることからC群→B群→A群の順に形成されたと推定する。

6 石錐

井ノ上遺跡の調査区から出土した石錐は1点で、チャートを石材とする(第13図132)。本例は上下両端に錐部を作出している。素材は不定形剥片を用い、厚い打面側に加工を集中させた部分と、素材の端部の薄い部分を僅かに加工した錐部からなる。

7 その他の剥片石器

ここではこれまで記述していない剥片石器について、一括して記載する。

RF(加工痕ある剥片)は加工を施しているもの、形態から明確な器種が判明しないものか、未成品段階の例を含んでいる。この中には楔形石器の未成品と考えられる例があり(第15図141,142,144)、扁平な器体で薄い剥片を表裏両面で剥離している。このうち一例は短軸方向に両側から平坦剥離を加えており、あるいは石鏃の初期未成品か(144)。石鏃の初期未成品と推定される例はこのほかにもあり、楕円形の剥片の表裏に部分的な平坦な調整を加えている(第15図145)。また若干の加工を加えただけで、末端に刃こぼれ状の剥離の観察される例がある(第13図131)。RFは14点出土しており、石材の内訳はチャートが9点、姫島産黒曜石が2点、推定腰岳・牟田系黒曜石が1点、不明2点である。

UF(刃こぼれのある剥片)3点出土している。一例は横長剥片を用い、打面部と相対する縁部に刃こぼれが生じている。石材はサヌカイトが1点、姫島産黒曜石が1点、チャートが1点である。

8 剥片

剥片は40点ある。主体をなすのは不定形の剥片であるが、他に縦長剥片・幅広剥片(第15図143,146)がある。石材は珪質頁岩1点、腰岳・牟田系黒曜石1点、サヌカイト1点、チャートが24点、姫島産黒曜石が10点である。

9 チップ

チップは99点ある。剥片剥離や石器製作時の残滓がチップである。石材は安山岩1点、珪質頁岩3点、サヌカイト2点、スレートが5点、チャートが43点、姫島産黒曜石が42点である

10 凹石

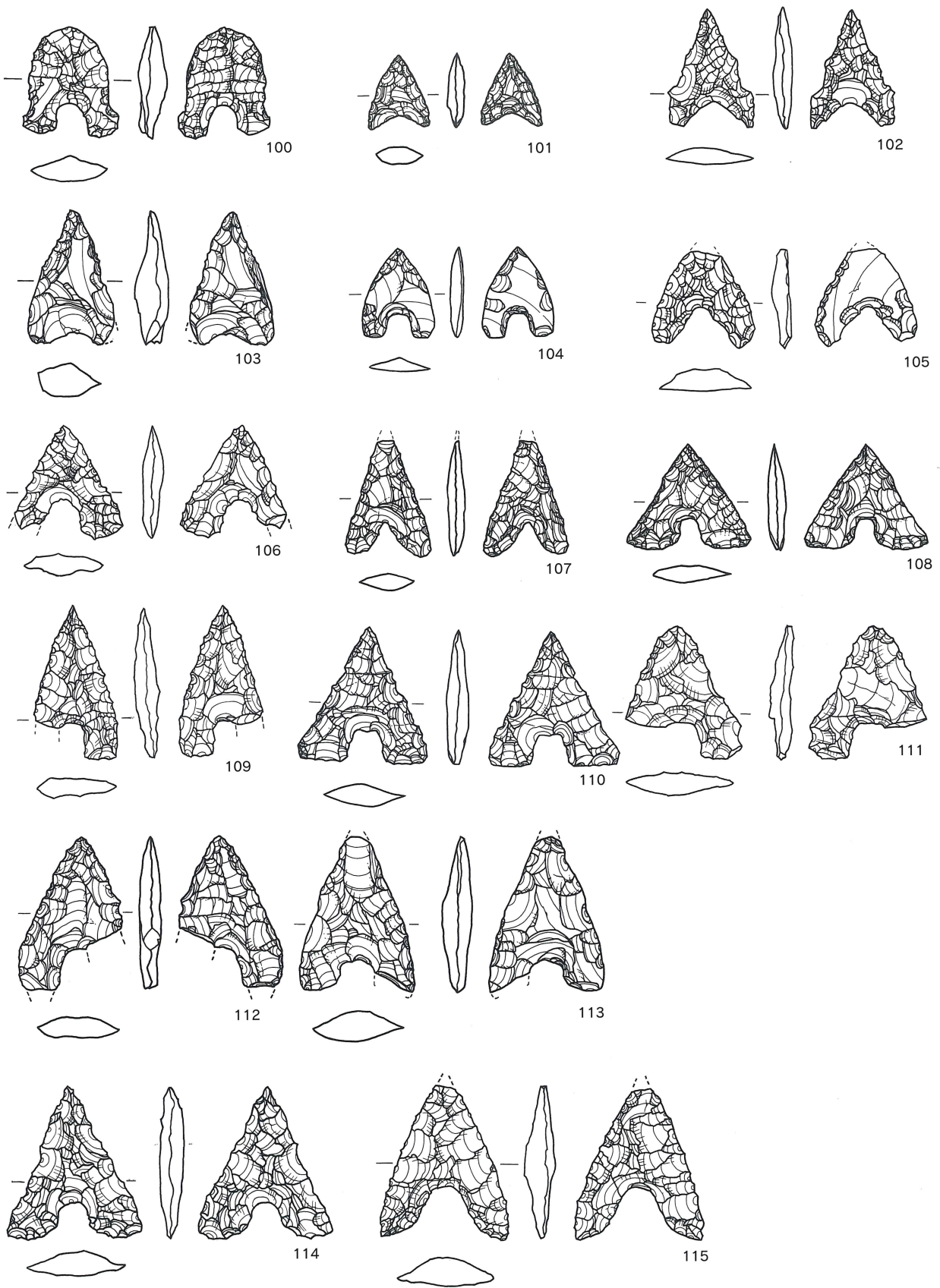
凹石は3点あり、石材不明であるが在地産の石である。分厚い長楕円形の剥片の真ん中に受けによる打撃痕が生じている(第23図171・172)。周囲の打痕も著しい。

11 敲石・磨石

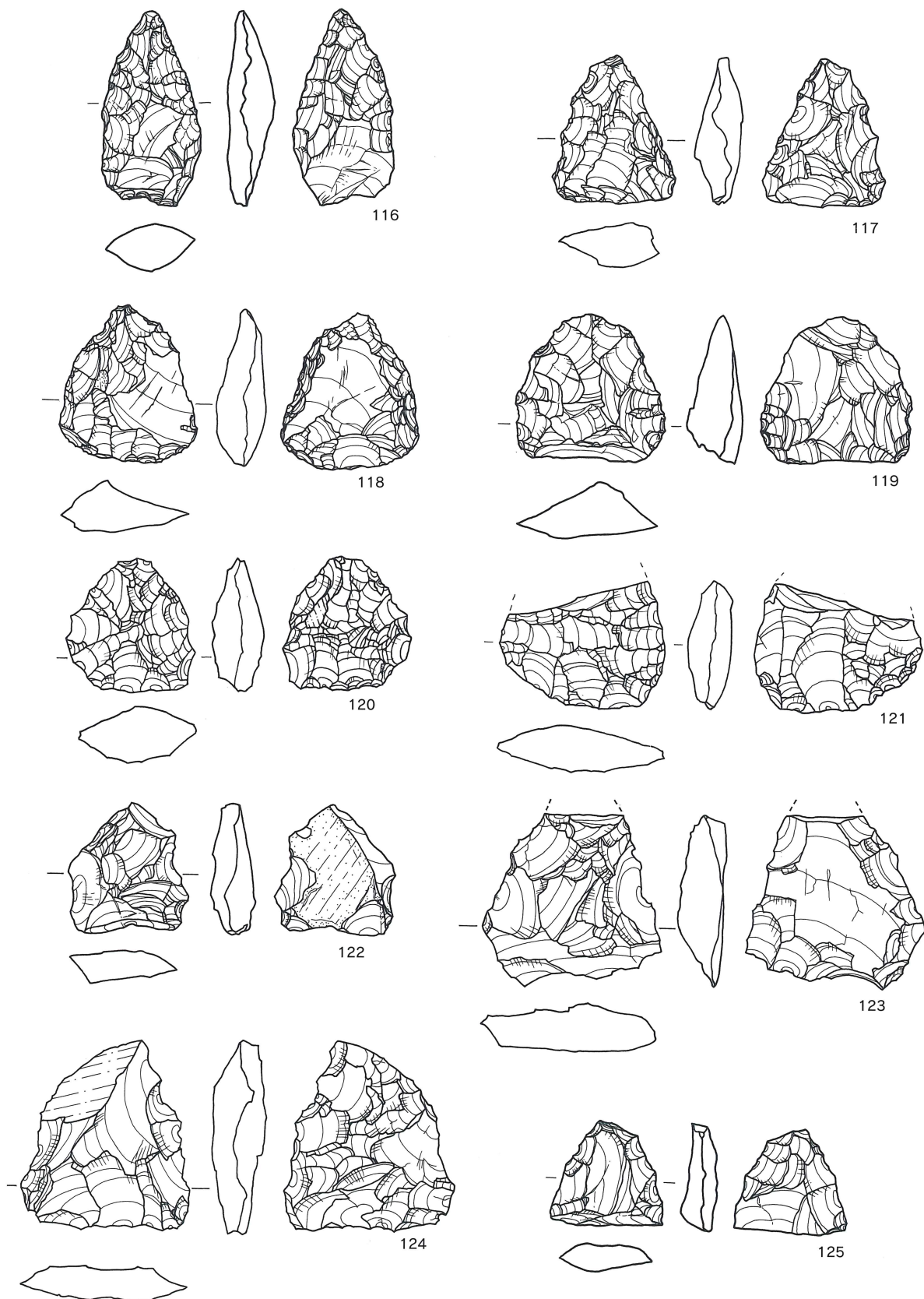
敲石は54点、磨石は1点あり、石材不明であるが在地産の石である。磨石は硬質砂岩の川原石を利用した石鏃形の例で、上下両側の縁部に細かい打痕が残るほか、表裏両面に磨痕が形成されている(第22図167)。敲石は大型の事例(第19図156～第20図159,第21図164～166,第22図168・169,第23図173,第24図176・177)と小型の事例からなる(第20図160～第21図163,第23図170)。図示しているとおり、これらは平面形が細長の一群と円・楕円形の一群に分類できる。円・楕円形の一群には分厚い縁部を中心に著しい小打痕が形成されている例がある(第21図164～166,第22図168)。細長の一群は端部から側縁部にかけて著しい打痕がみられ、中には衝撃のために破損や縦方向の剥離痕の生じた例もある(第20図158・159,第24図176)。後者の例は剥片剥離用の敲石か。小型の例も平面形が細長の一群(第21図162・163,第24図174)と円・楕円形の一群に分類できる。細長例のうち、大型の円・楕円形の一群が半分に破損した後も用いられ、破損面にも衝撃剥離痕の生じた例がある(第16図151・152,第20図161)。これまで観察してきた敲石のうち、小型の例は重量から考えて素材獲得・剥片剥離用ではなく、石器の細部加工用の用途が考えられる。

12 台石

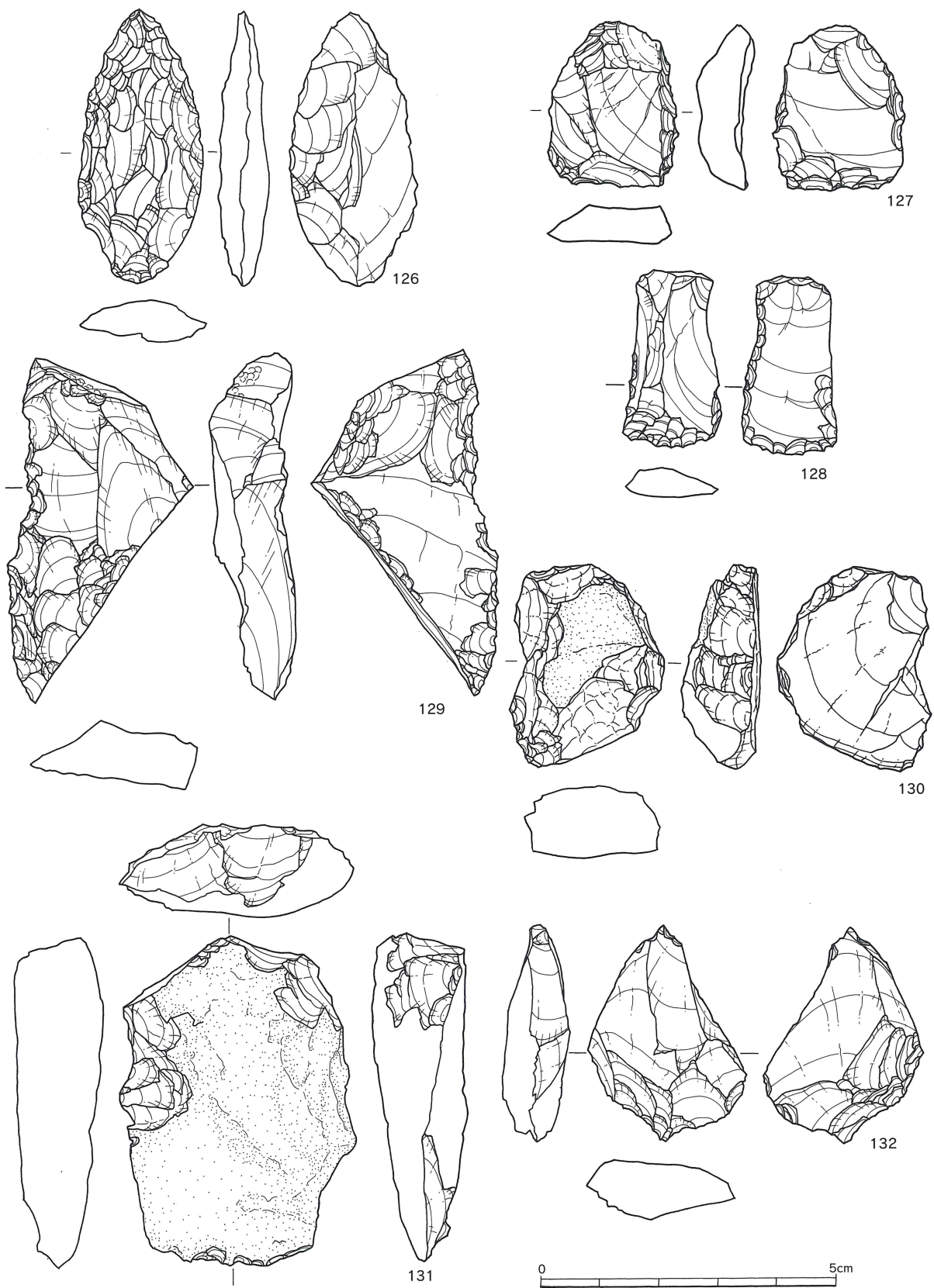
台石は3点、石材は砂岩2例・花崗岩1例である。破損した例(第18図154・155)と完全品(第17図153)であるが、扁平な側面形である。完全品には表裏両面の平坦面に打痕が生じている。破損品には縁部に剥離痕が一面観察される部分があり、あるいは礫器転用の意図があったのであろうか。



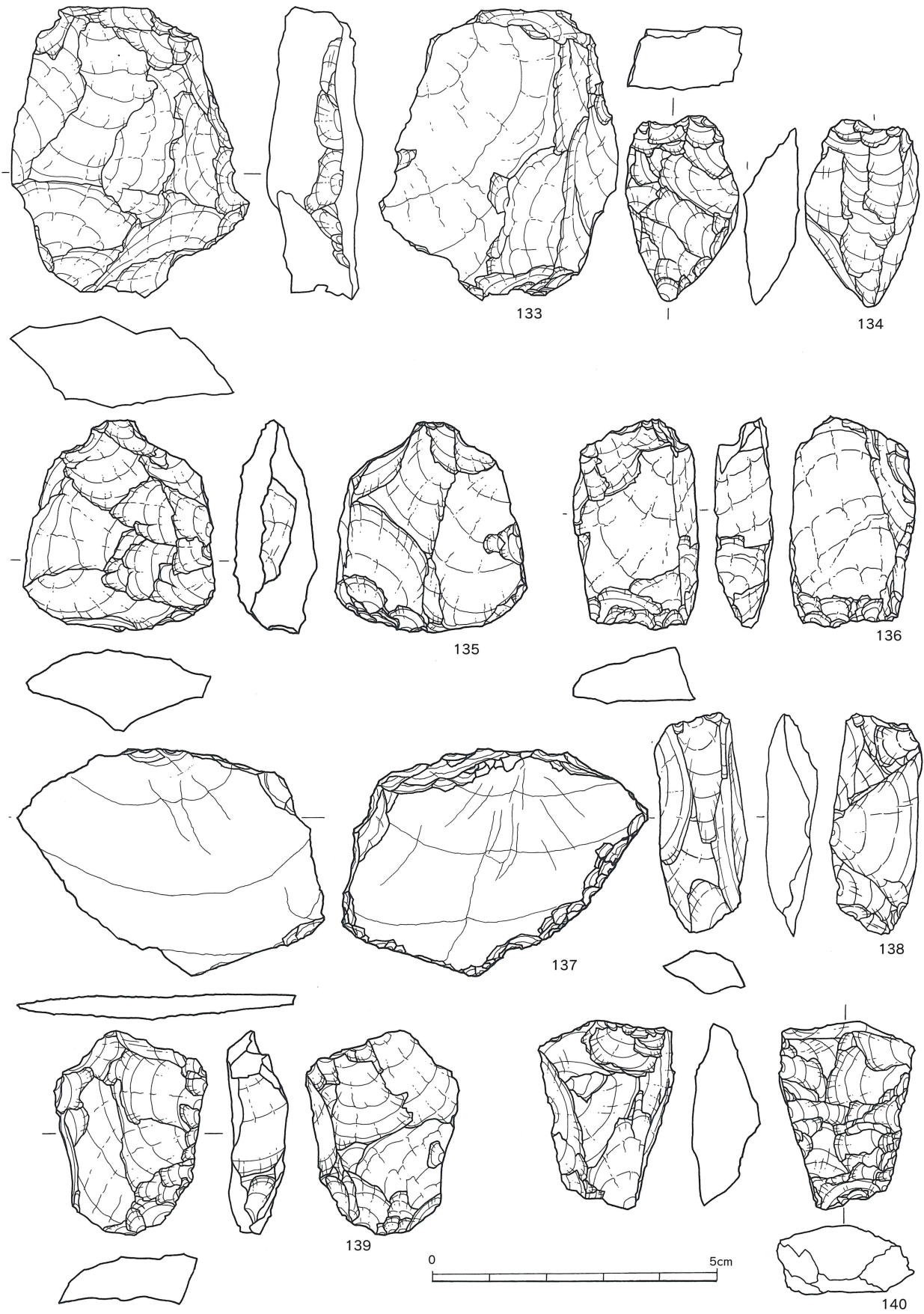
第11図 井ノ上 縄文早期遺物の実測図(6)



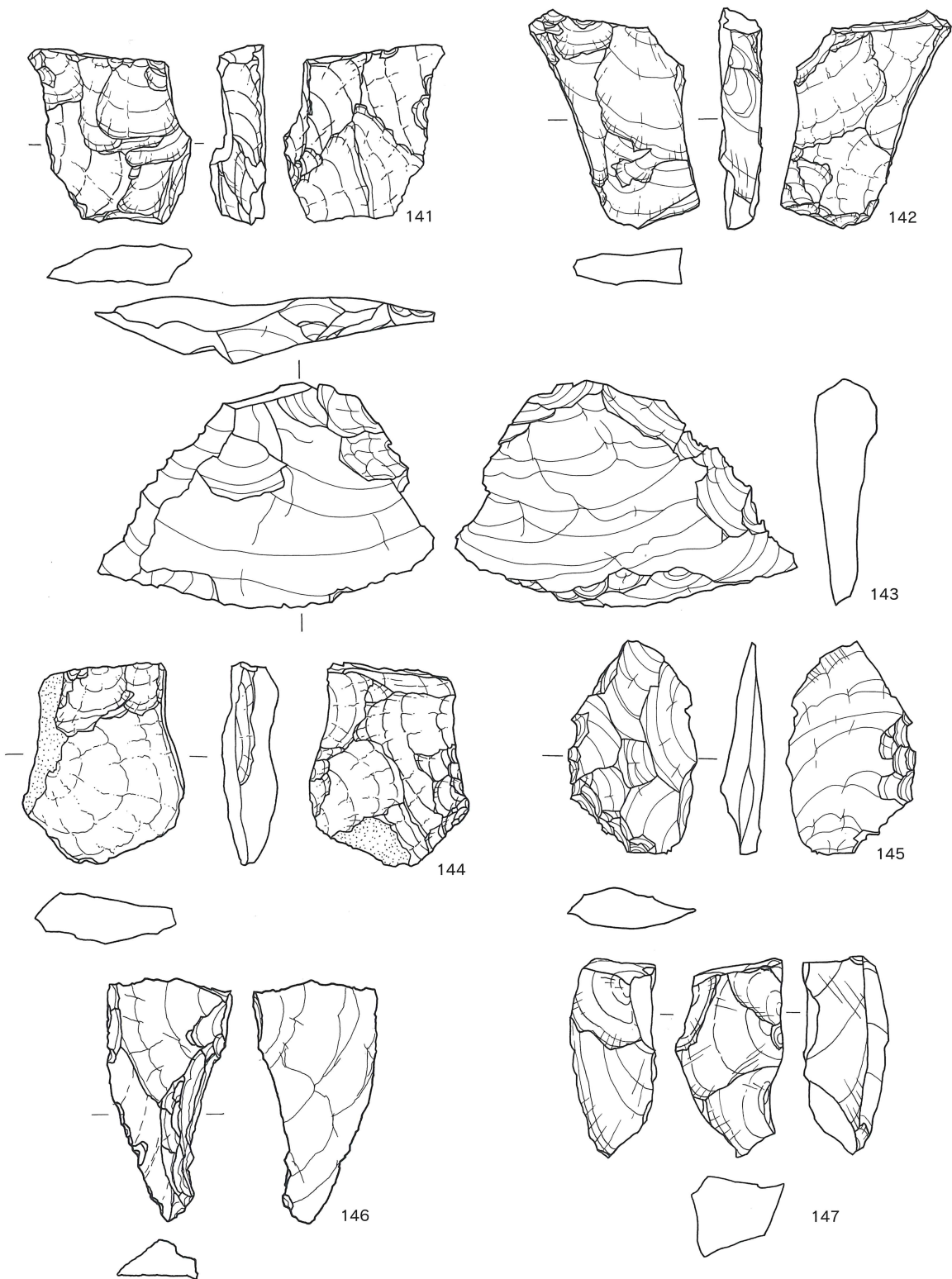
第12図 井ノ上 縄文早期遺物の実測図(7)



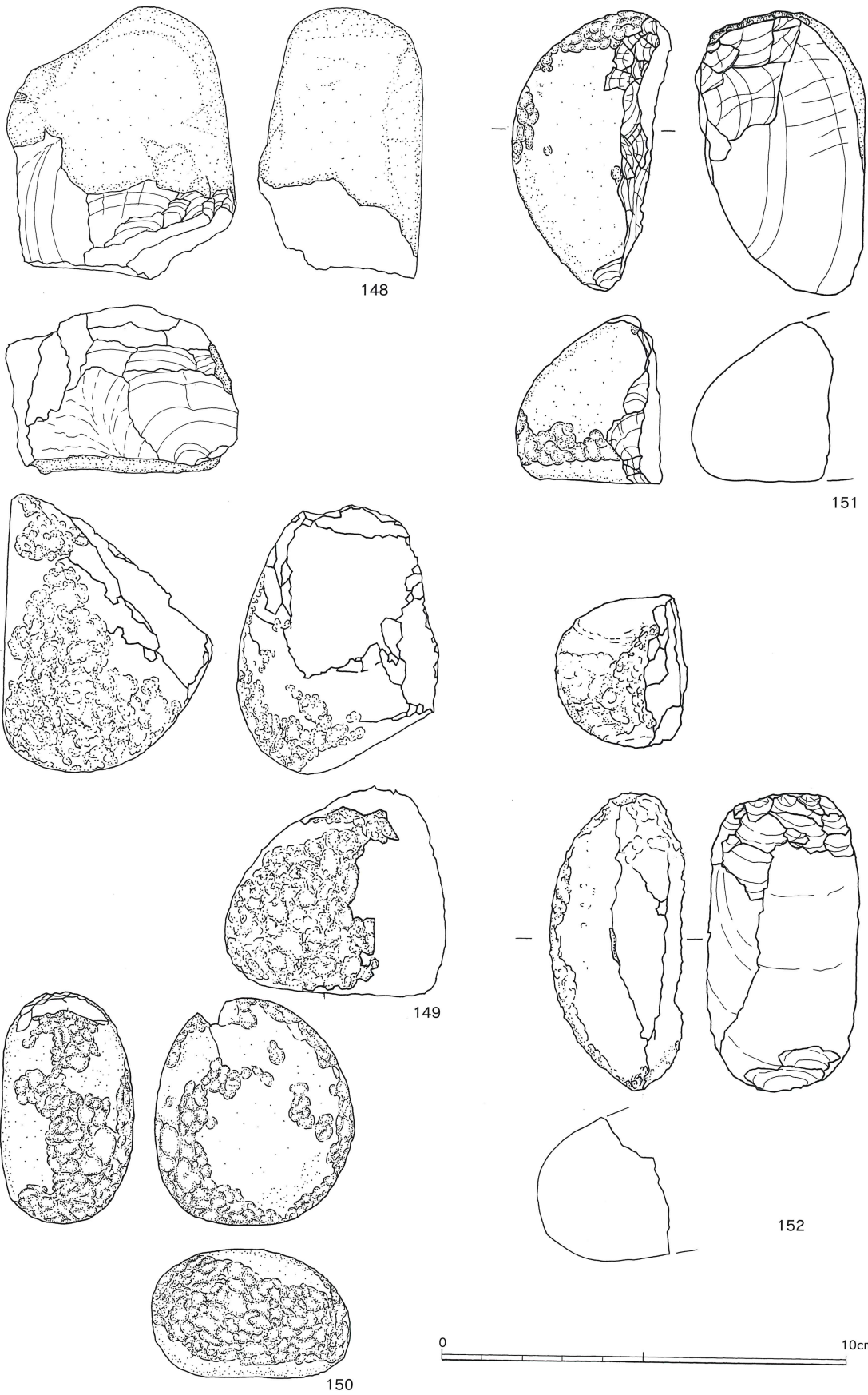
第13図 井ノ上 縄文早期遺物の実測図(8)



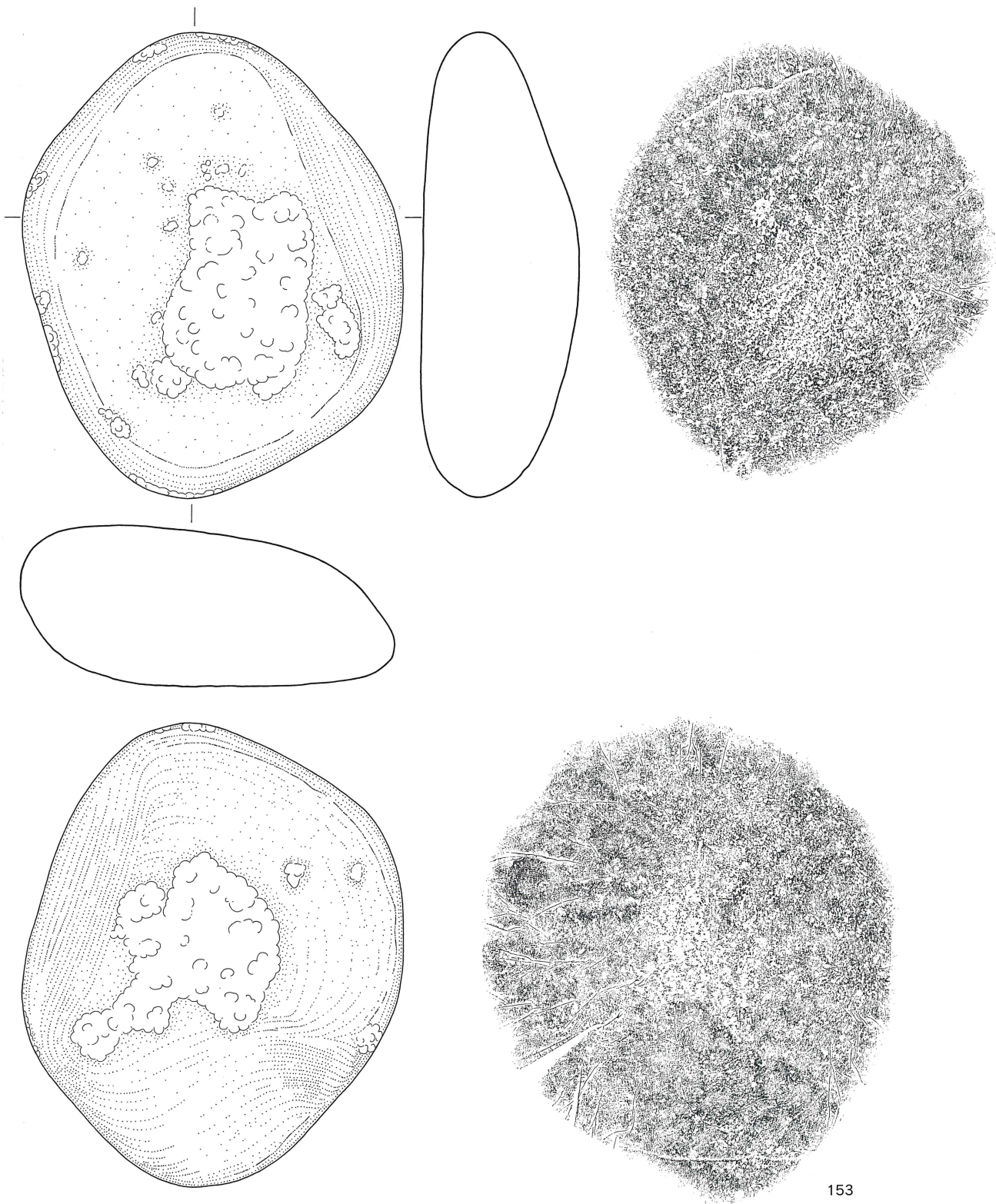
第14図 井ノ上 縄文早期遺物の実測図(9)



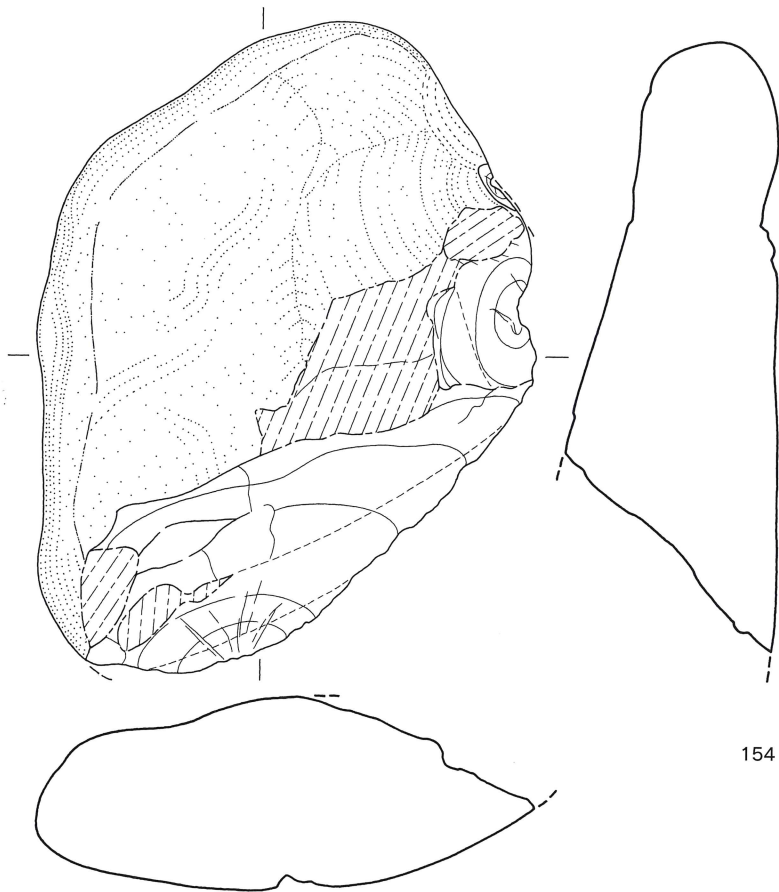
第15図 井ノ上 縄文早期遺物の実測図(10)



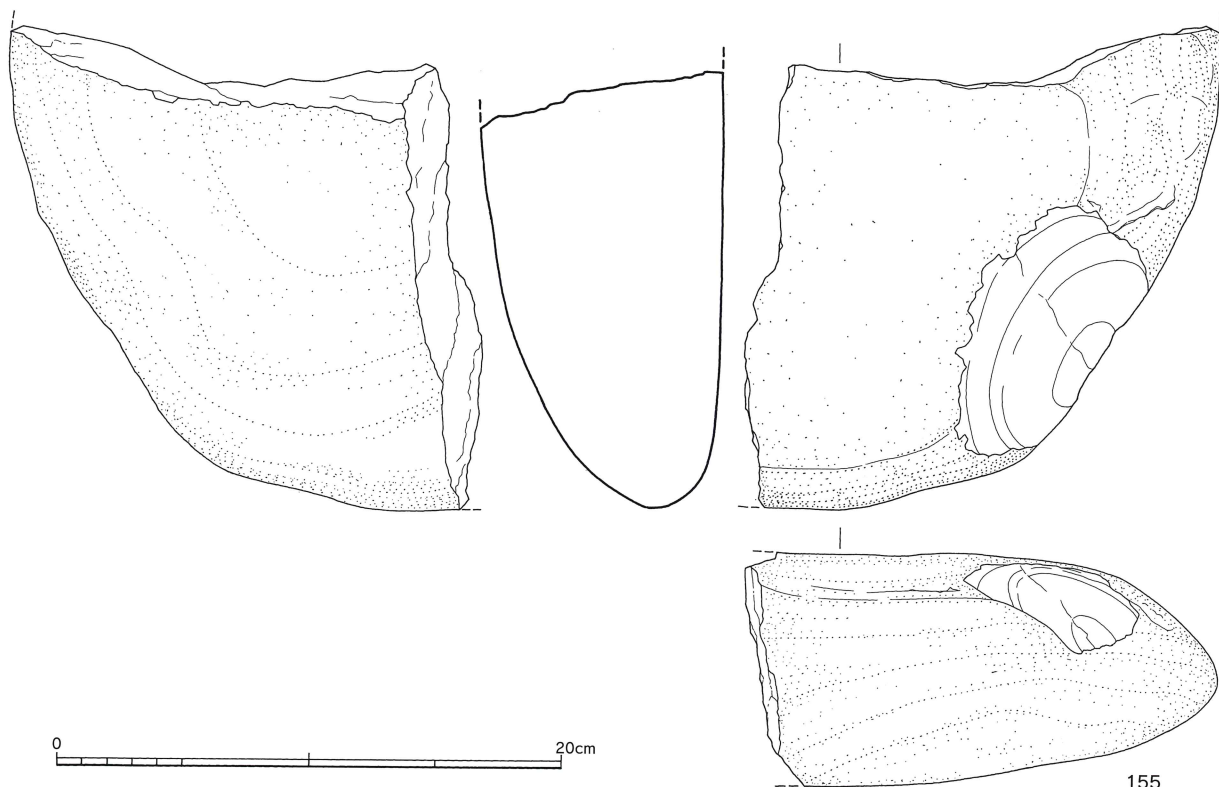
第16図 井ノ上 縄文早期遺物の実測図(11)



第17図 井ノ上 縄文早期遺物の実測図(12)

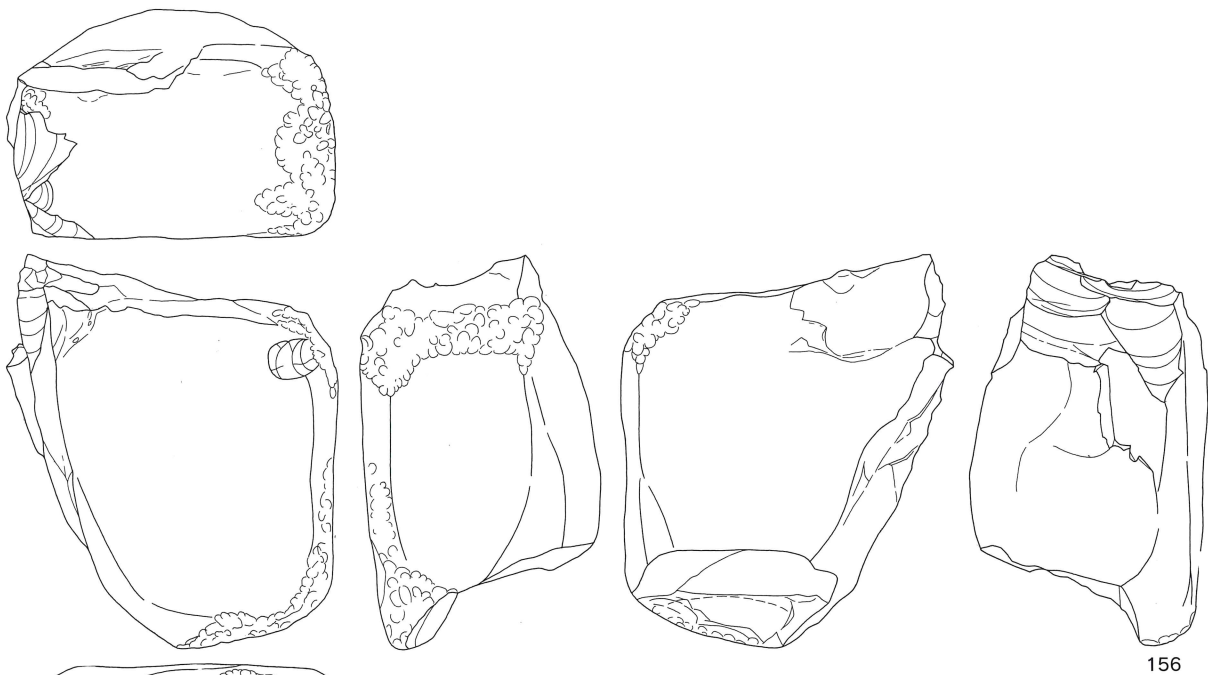


154

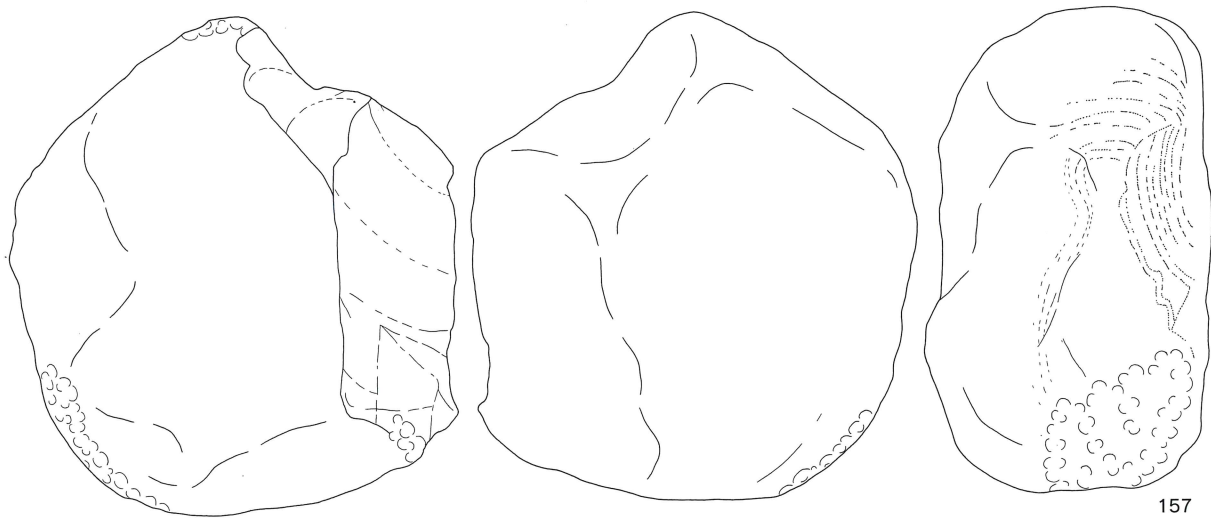
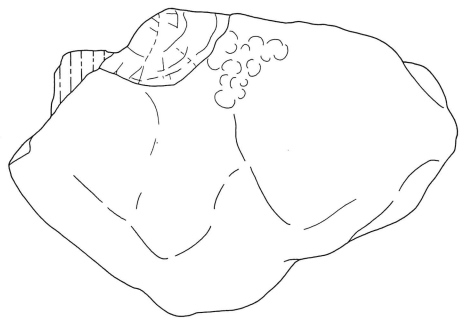
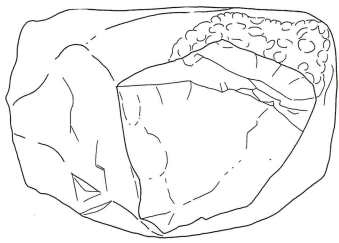
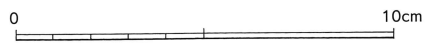


155

第18図 井ノ上 縄文早期遺物の実測図(14)

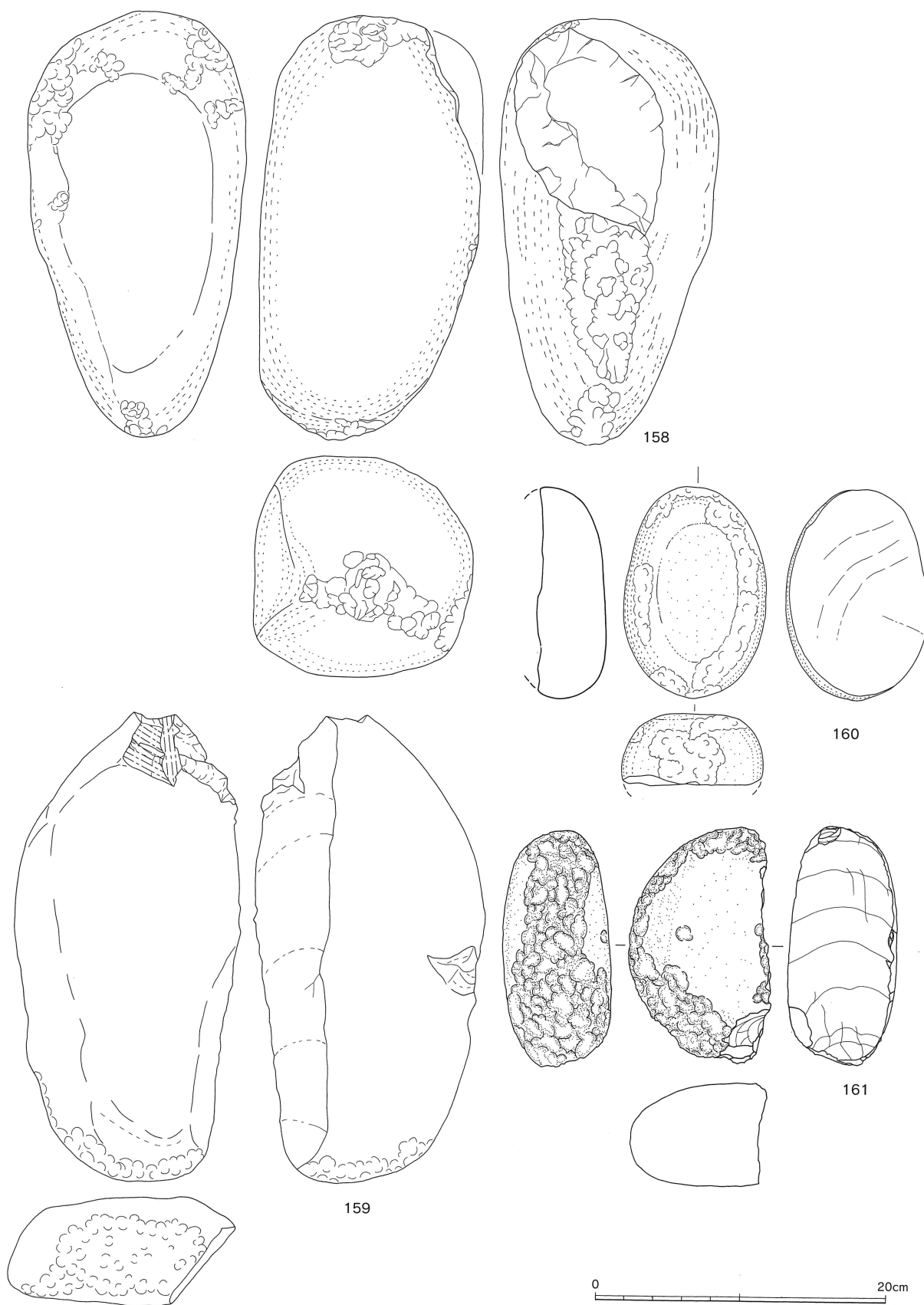


156

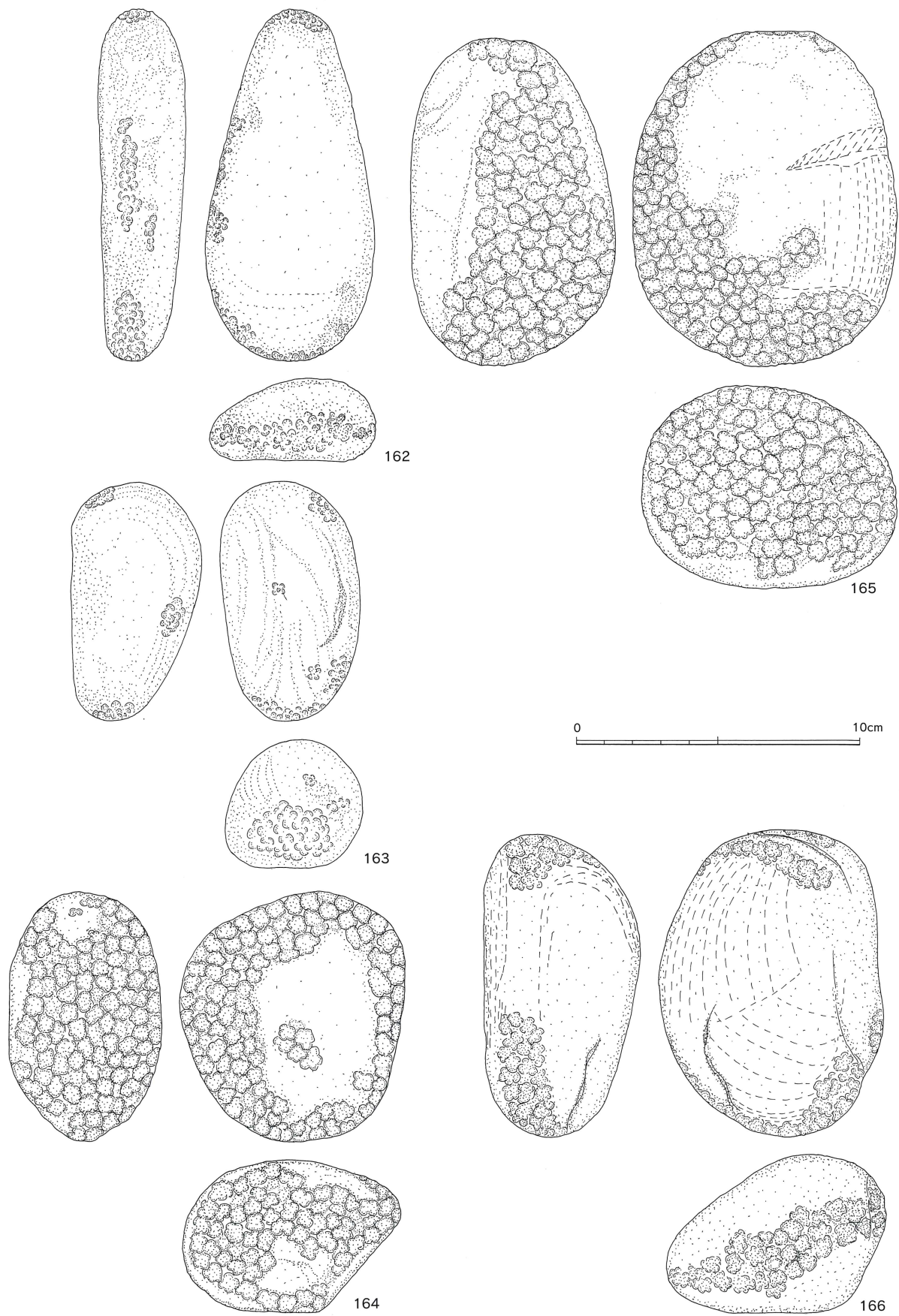


157

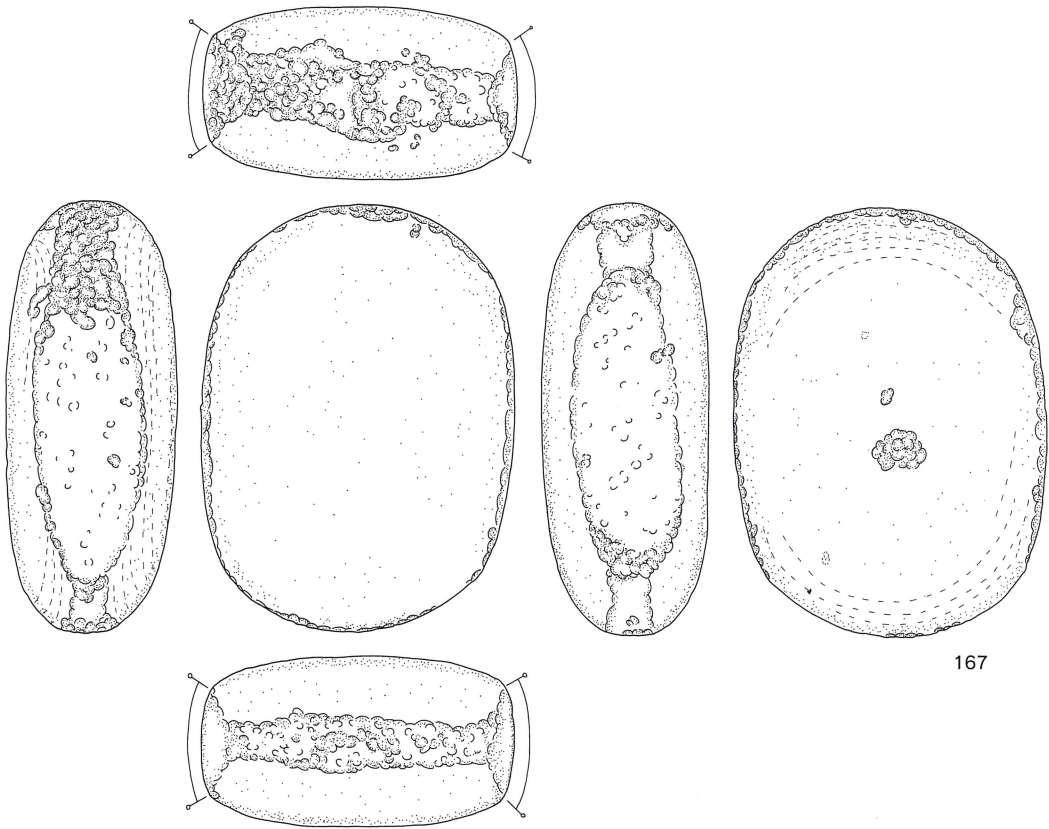
第19図 井ノ上 縄文早期遺物の実測図(15)



第20図 井ノ上 縄文早期遺物の実測図(16)

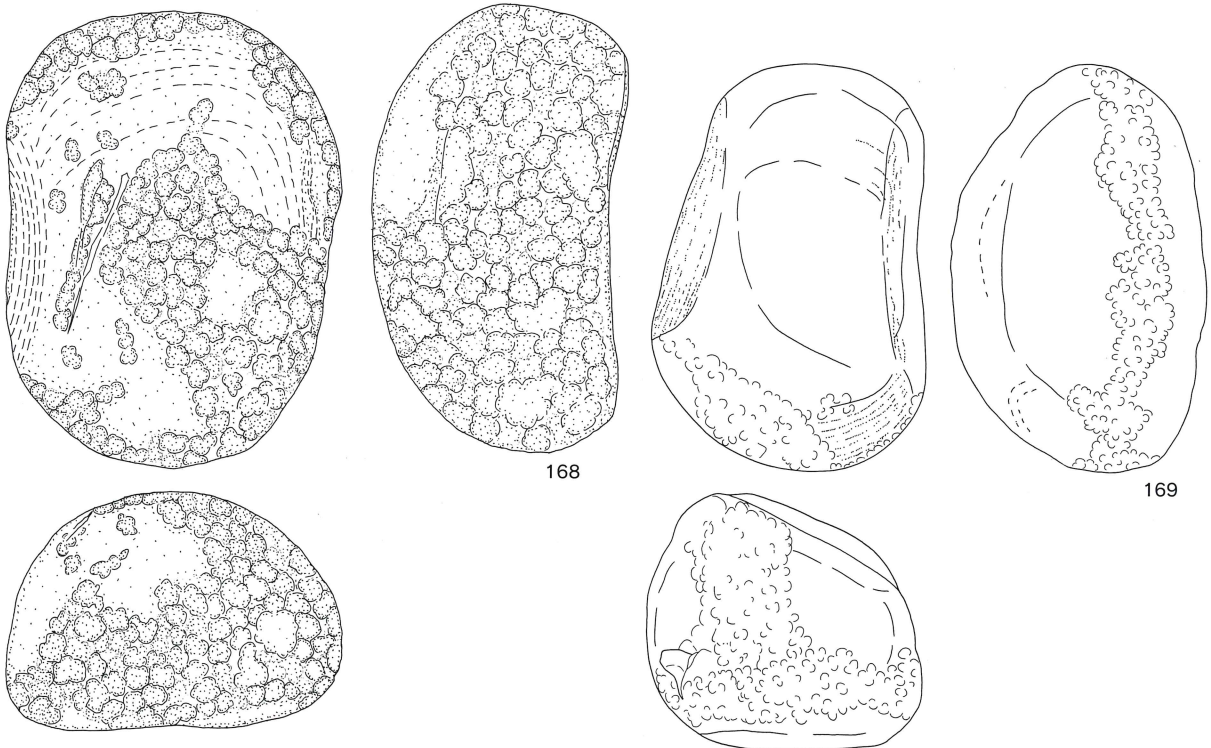


第21図 井ノ上 縄文早期遺物の実測図(17)



167

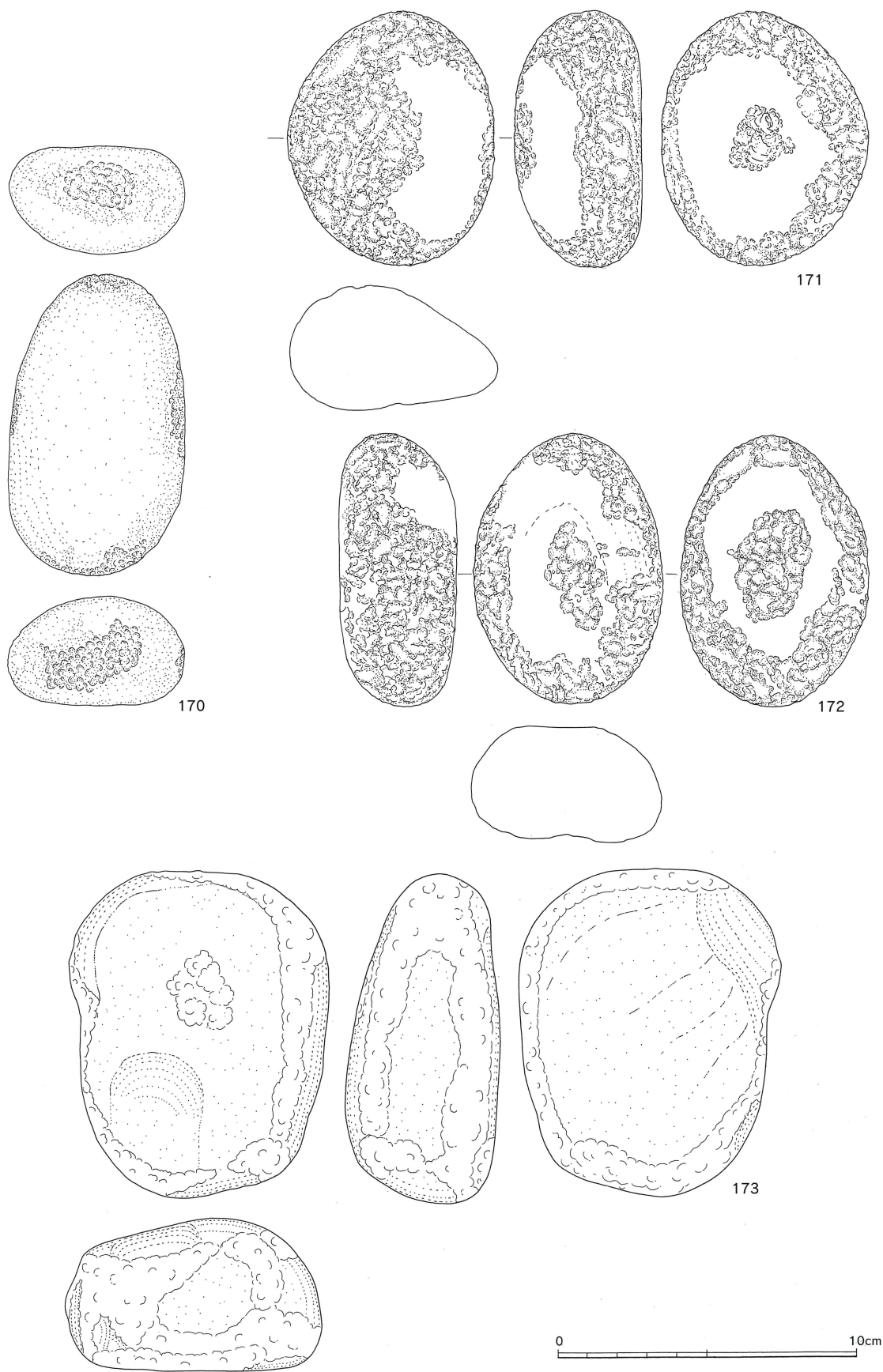
0 10cm



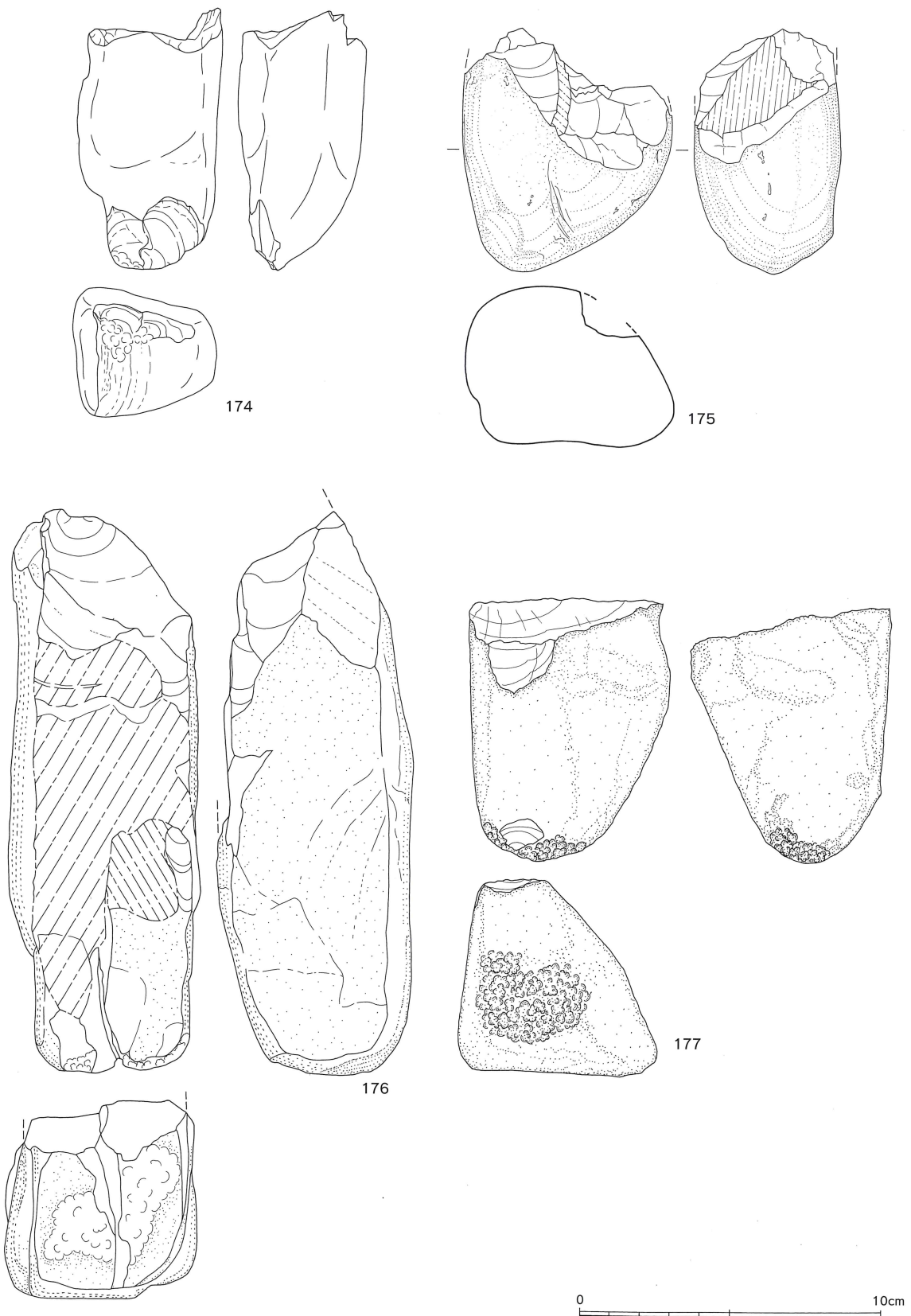
168

169

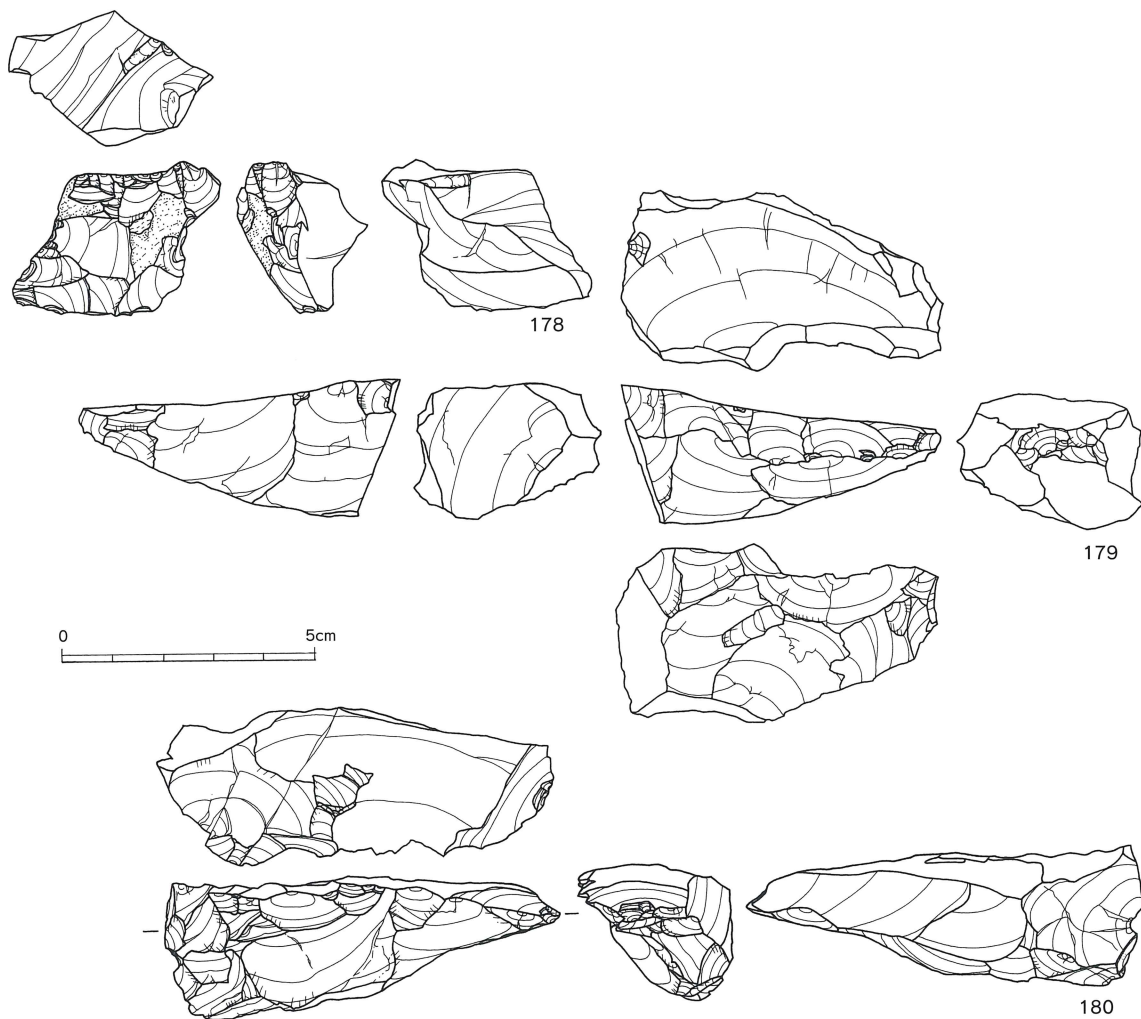
第22図 井ノ上 縄文早期遺物の実測図(18)



第23図 井ノ上 縄文早期遺物の実測図(19)



第24図 井ノ上 縄文早期遺物の実測図(20)



第25図 井ノ上 縄文早期遺物の実測図(21)

13 石核

多量の石器・剥片・チップ等が出土しているにもかかわらず剥片石器用の石核は驚くほど少ない。提示できる石核の数は5例に過ぎない(第15図147、第25図178~180,第38図211)。それも剥離がかなり進んだ残核とも言うべき資料が多い。一例は剥離が進み角柱状となった姫島産黒曜石を用いた石核で、最終的には短軸方向から小剥片を剥離している(第15図147)。他の3例も基本的には同様な最終形態となった石核であり、甲板面のような面が短軸方向に剥片剥離を行っている(第25図178~180)。この他、細長の三角錐状の石核で、やはり短軸方向に剥片剥離を加えた大形の石核(第38図210)。隣接石材はチャートである。以上の石核から剥離された剥片は長幅様々な不定形の剥片であり、大きさから考えて石鏃の素材用か。

14 礫器

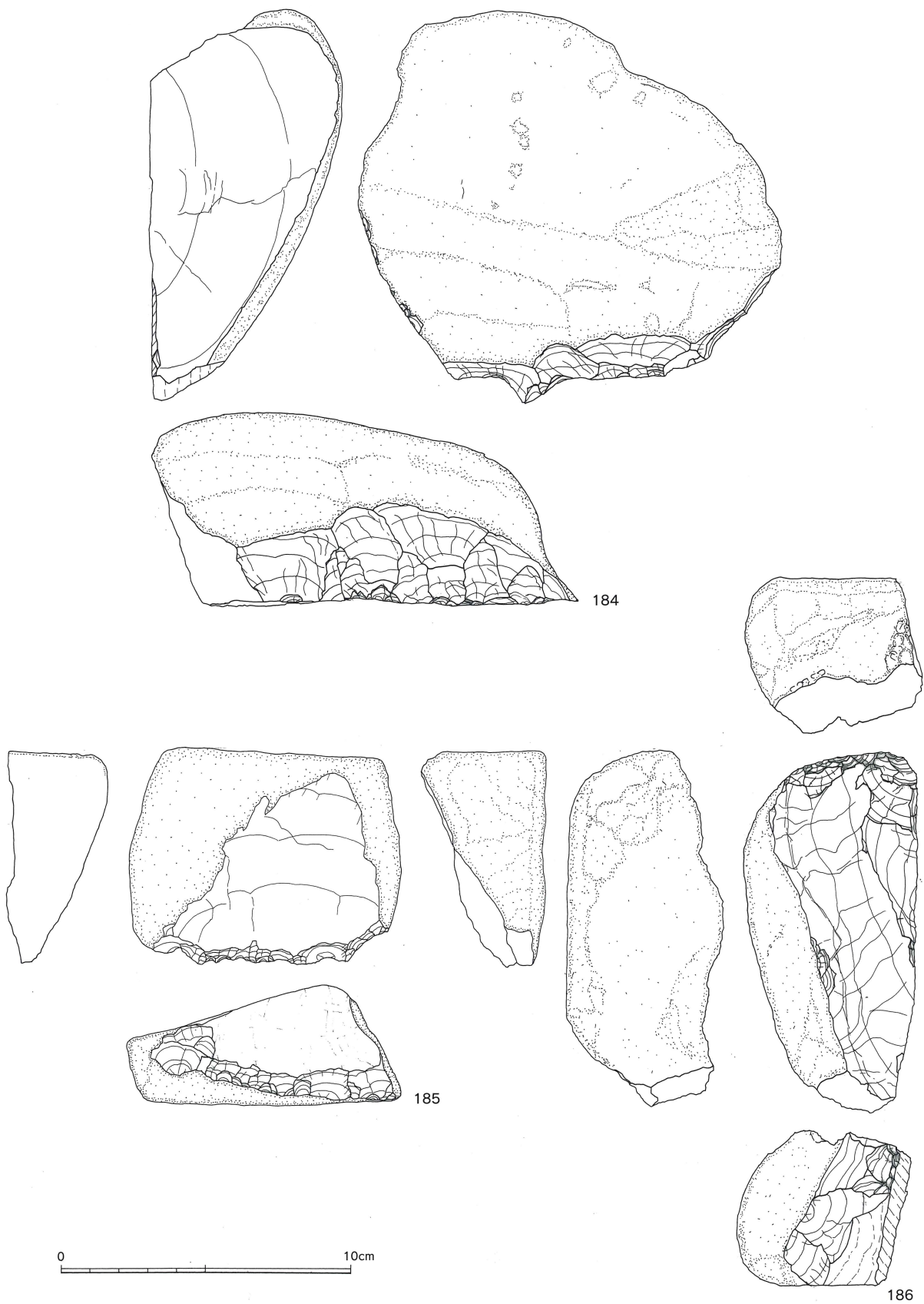
礫器は井ノ上遺跡の縄文時代早期のなかで最も多く、31点を占めている。礫器は大小様々であるが、小形の場合でも剥片石器類をはるかに凌駕する量と圧倒的な存在感であり、主要な生業に直結する石器と推定される。

A1類 細長い角柱状の端部にやや傾斜する打面部を作出するか、傾斜する礫面をそのまま利用するように長軸方向への剥離痕~細かい剥離痕が観察される例(第26図182,第27図186)。量は多くない。

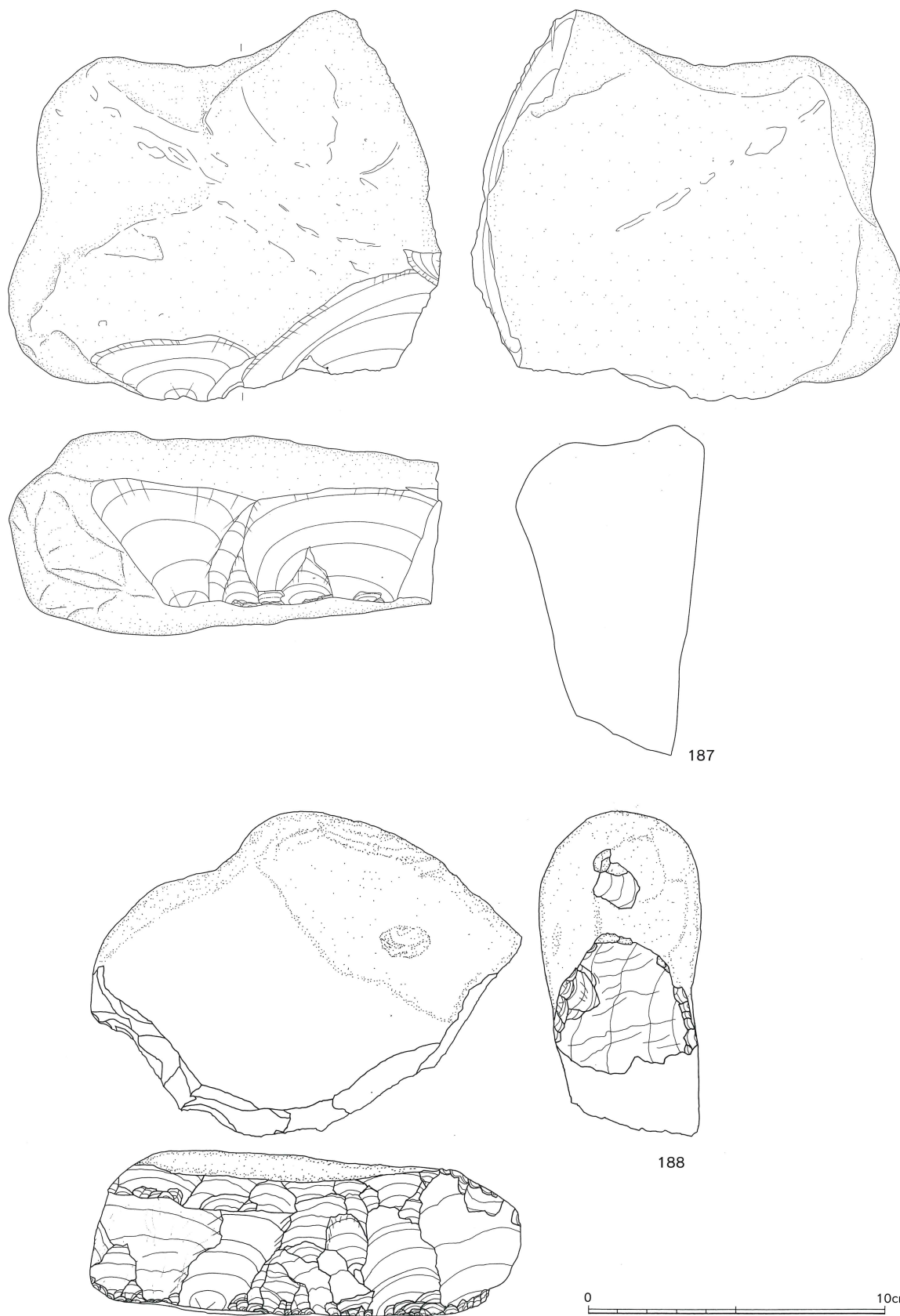
A2類 細長い角柱状の端部に急傾斜する剥片剥離を繰り返して、直線的な刃部を作出した例(第26図181,第35図204,)



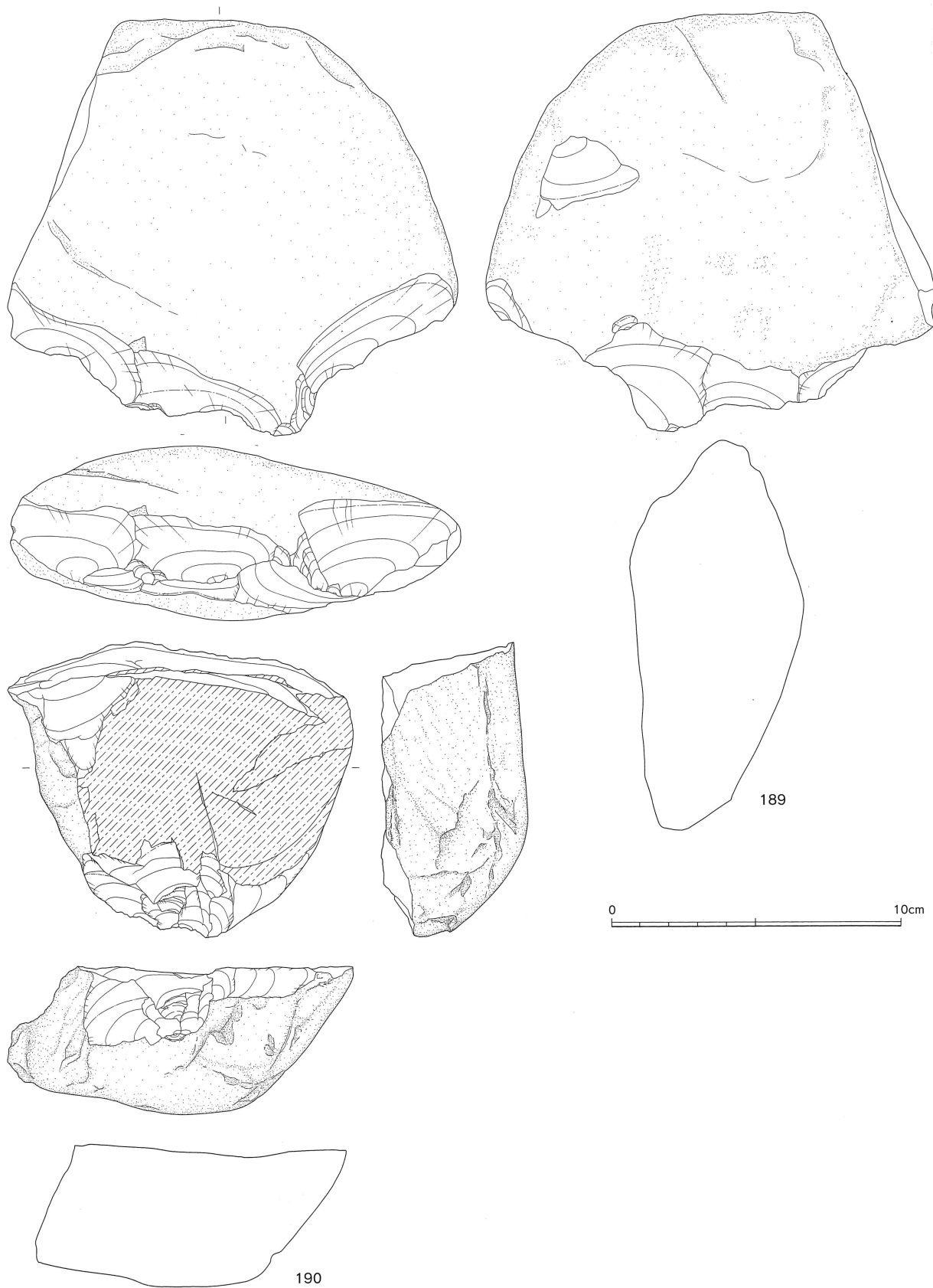
第26図 井ノ上 縄文早期遺物の実測図(22)



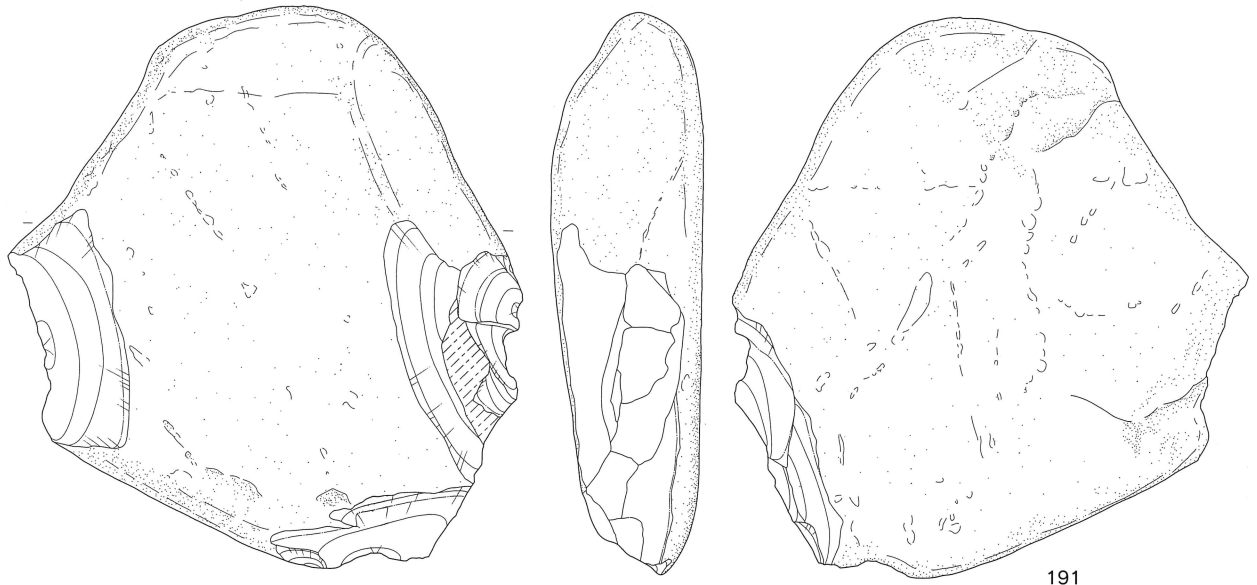
第27図 井ノ上 縄文早期遺物の実測図(23)



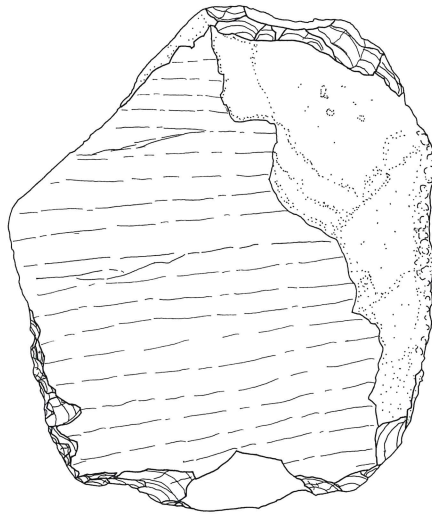
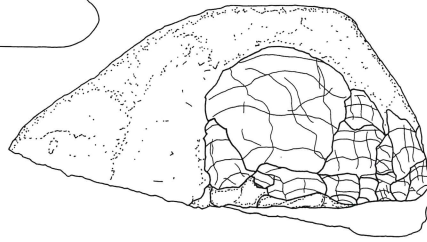
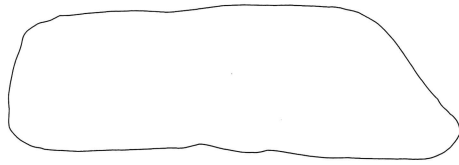
第28図 井ノ上 縄文早期遺物の実測図(24)



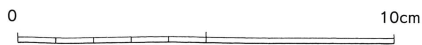
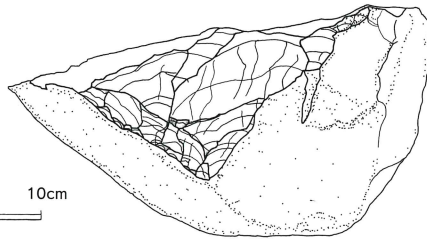
第29図 井ノ上 縄文早期遺物の実測図(25)



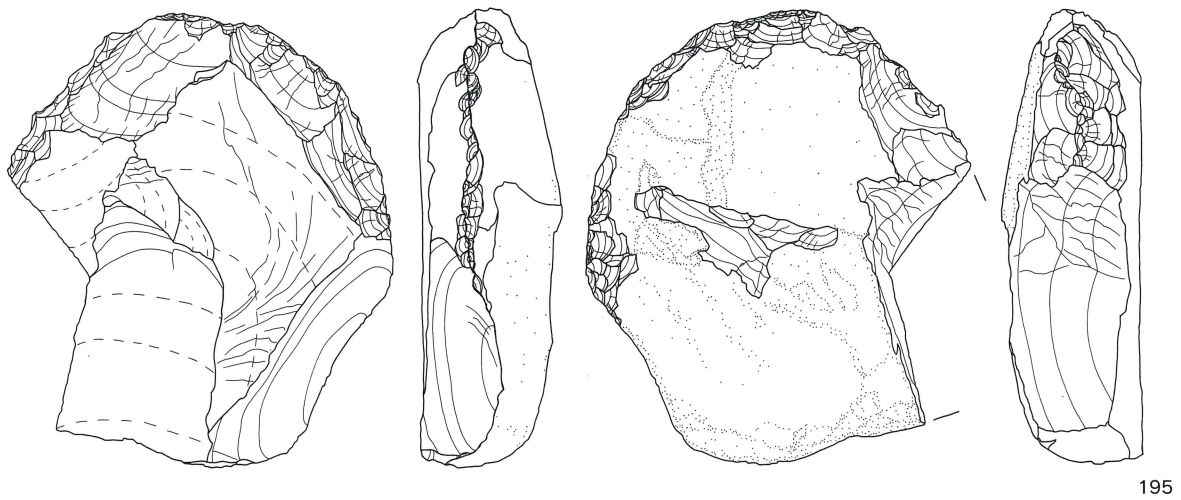
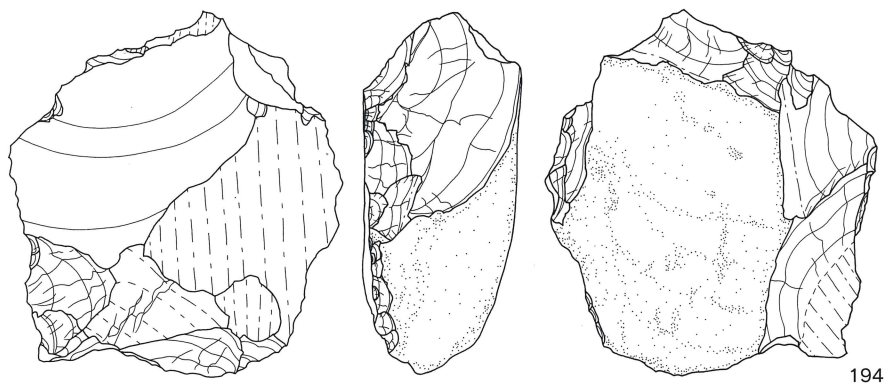
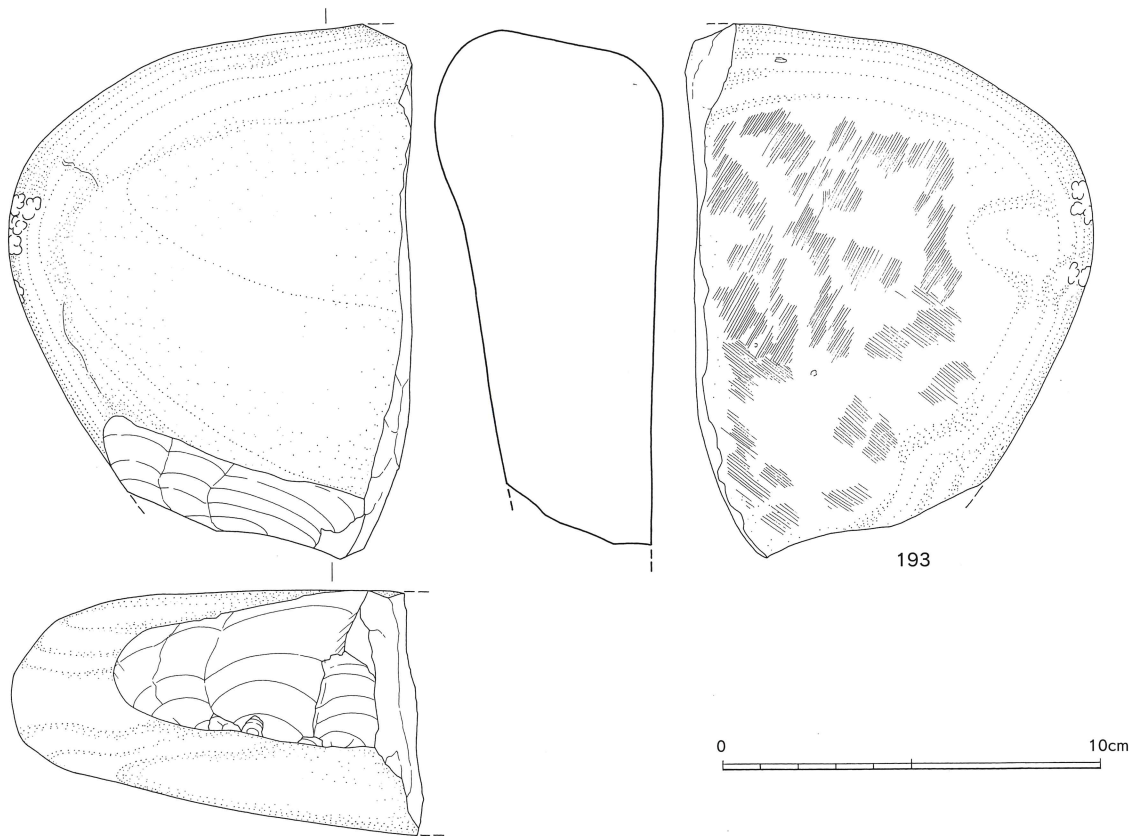
191



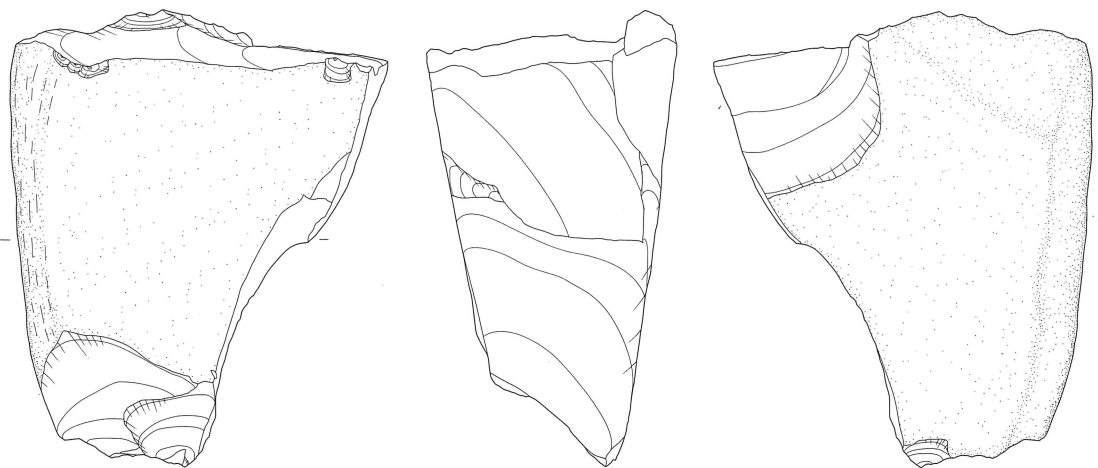
192



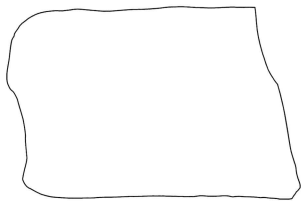
第30図 井ノ上 縄文早期遺物の実測図(26)



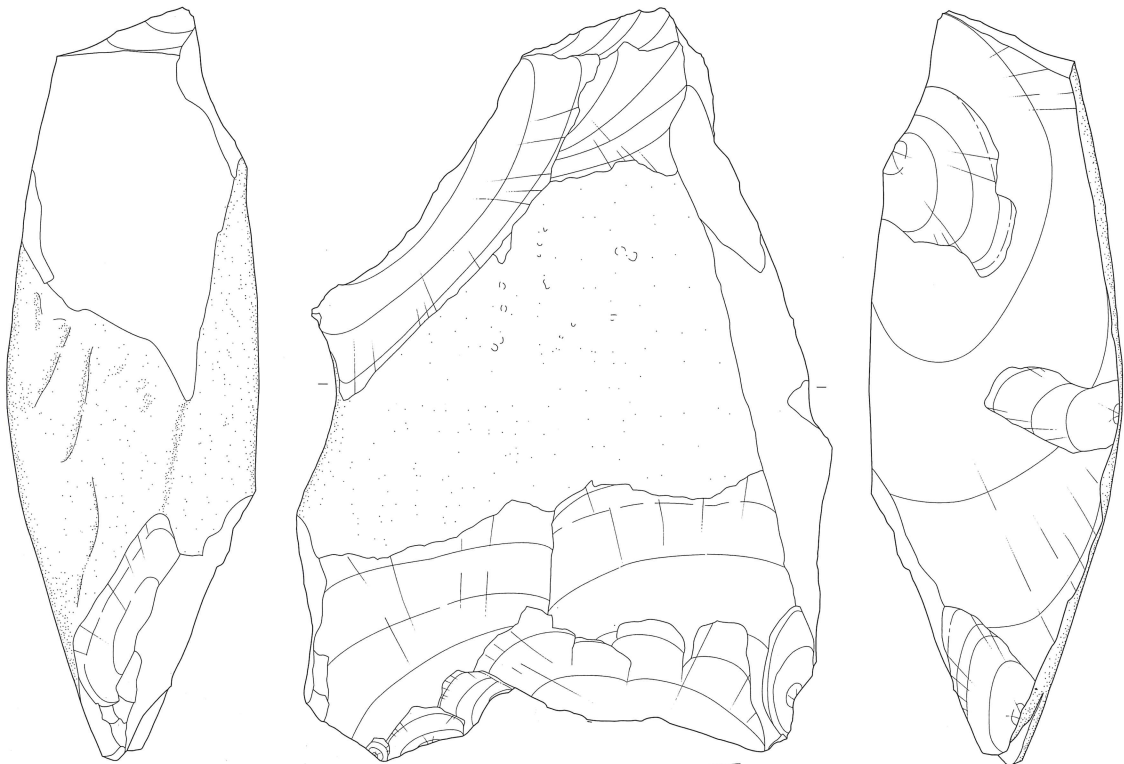
第31図 井ノ上 縄文早期遺物の実測図(27)



196

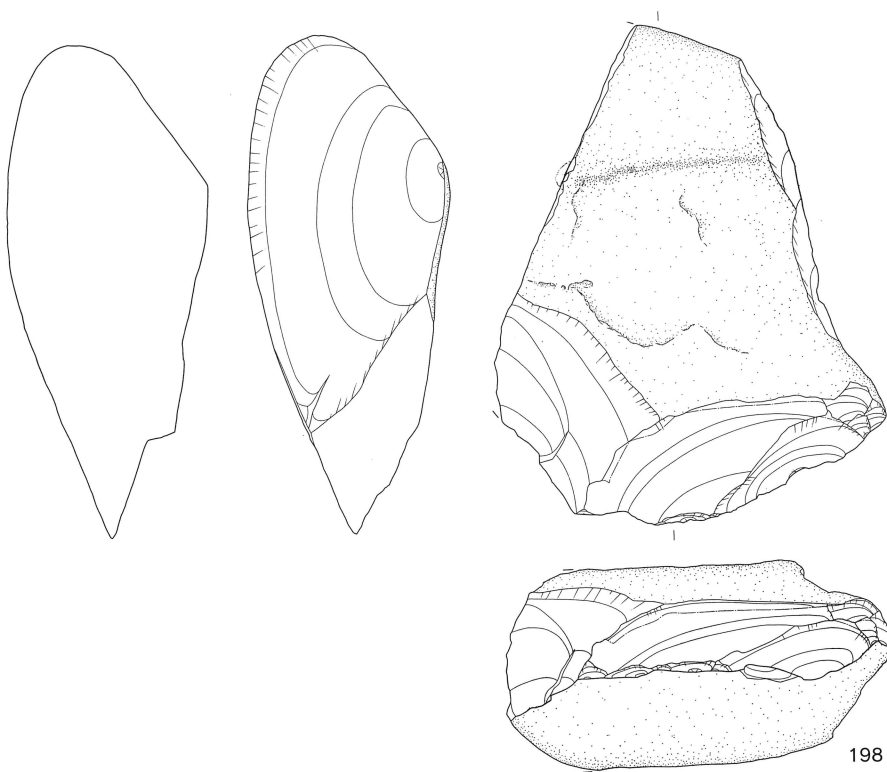


0 10cm

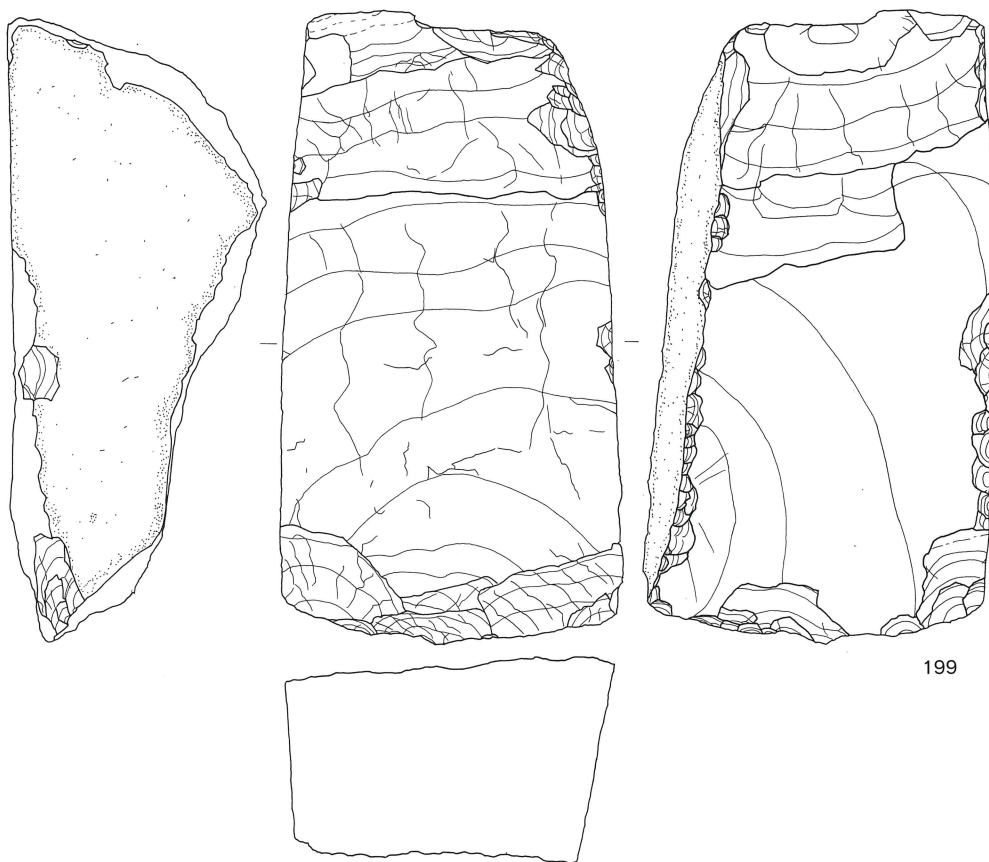


197

第32図 井ノ上 縄文早期遺物の実測図(28)



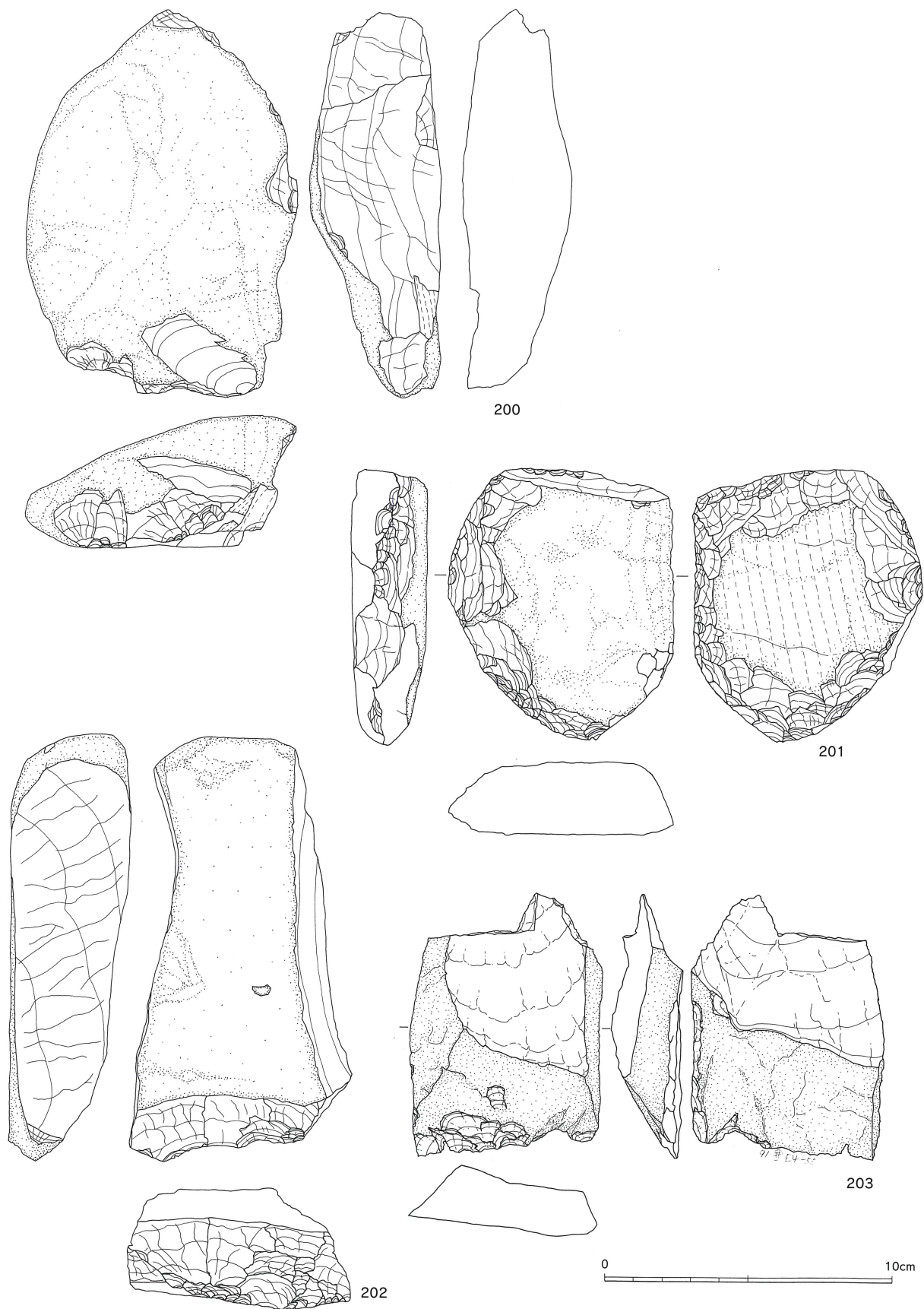
198



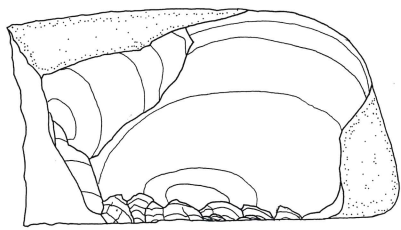
199

0 10cm

第33図 井ノ上 縄文早期遺物の実測図(29)



第34図 井ノ上 縄文早期遺物の実測図(30)

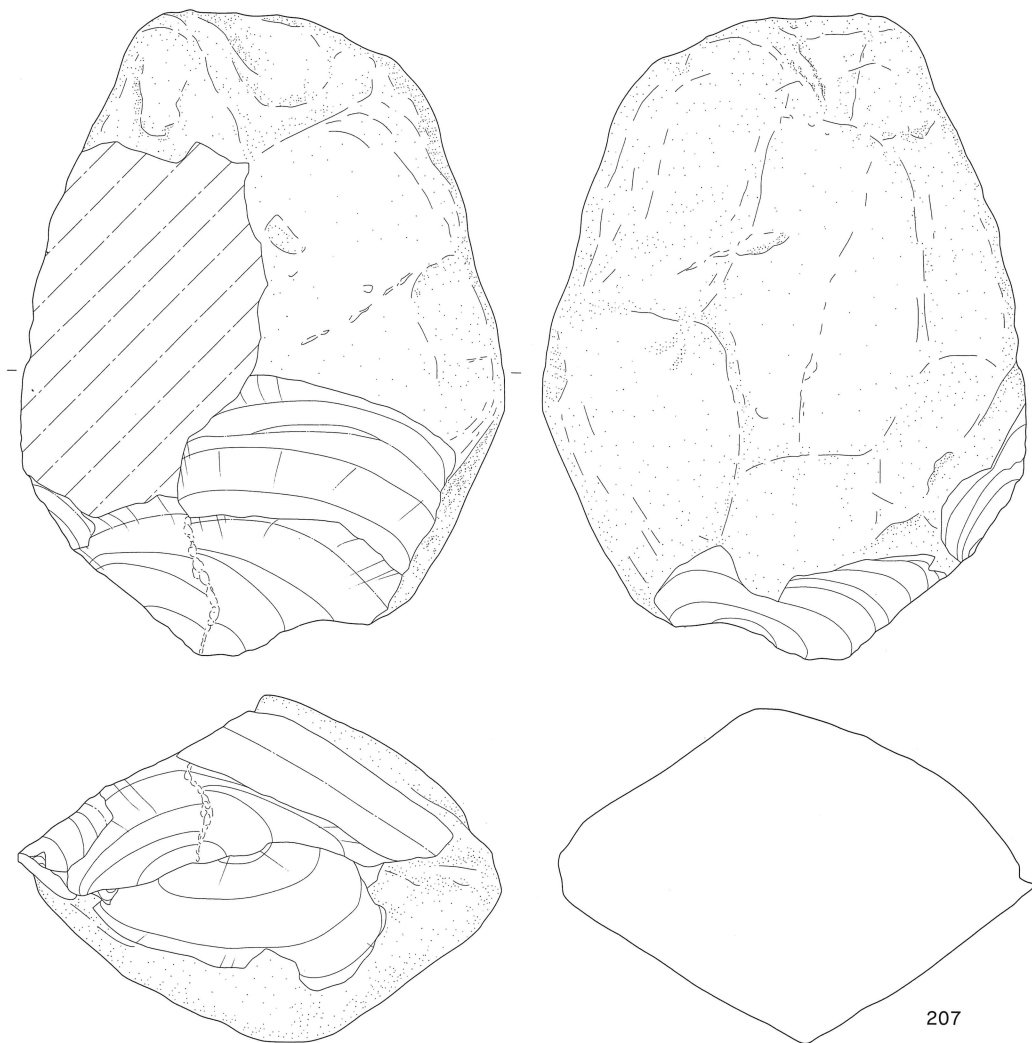
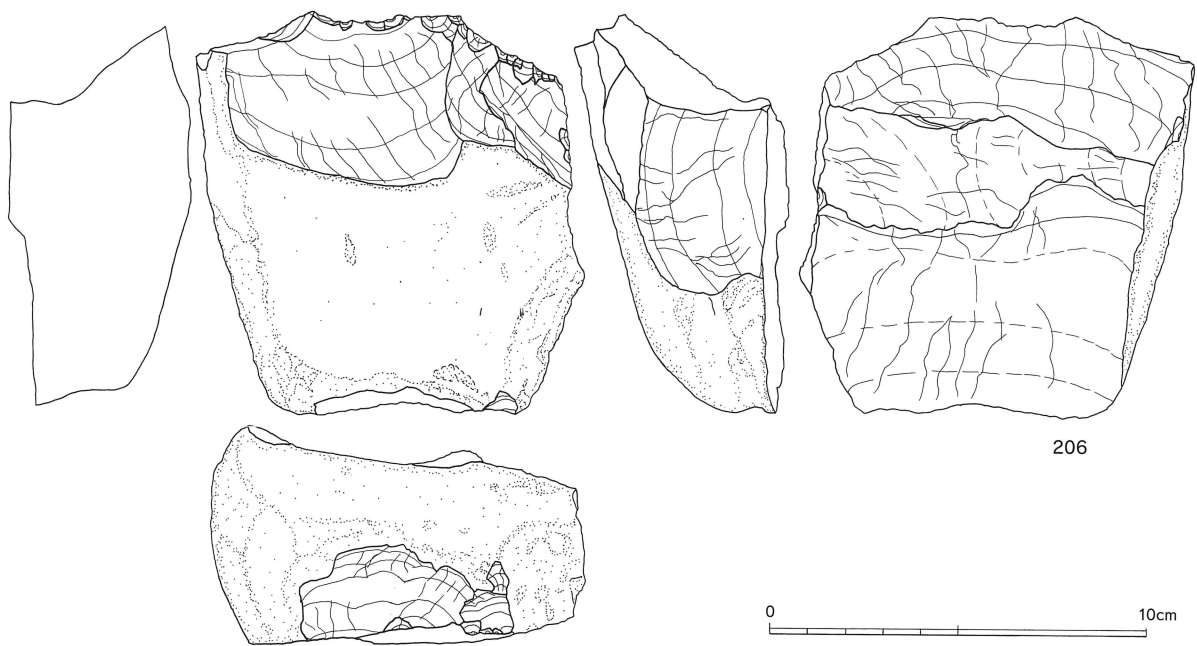


204

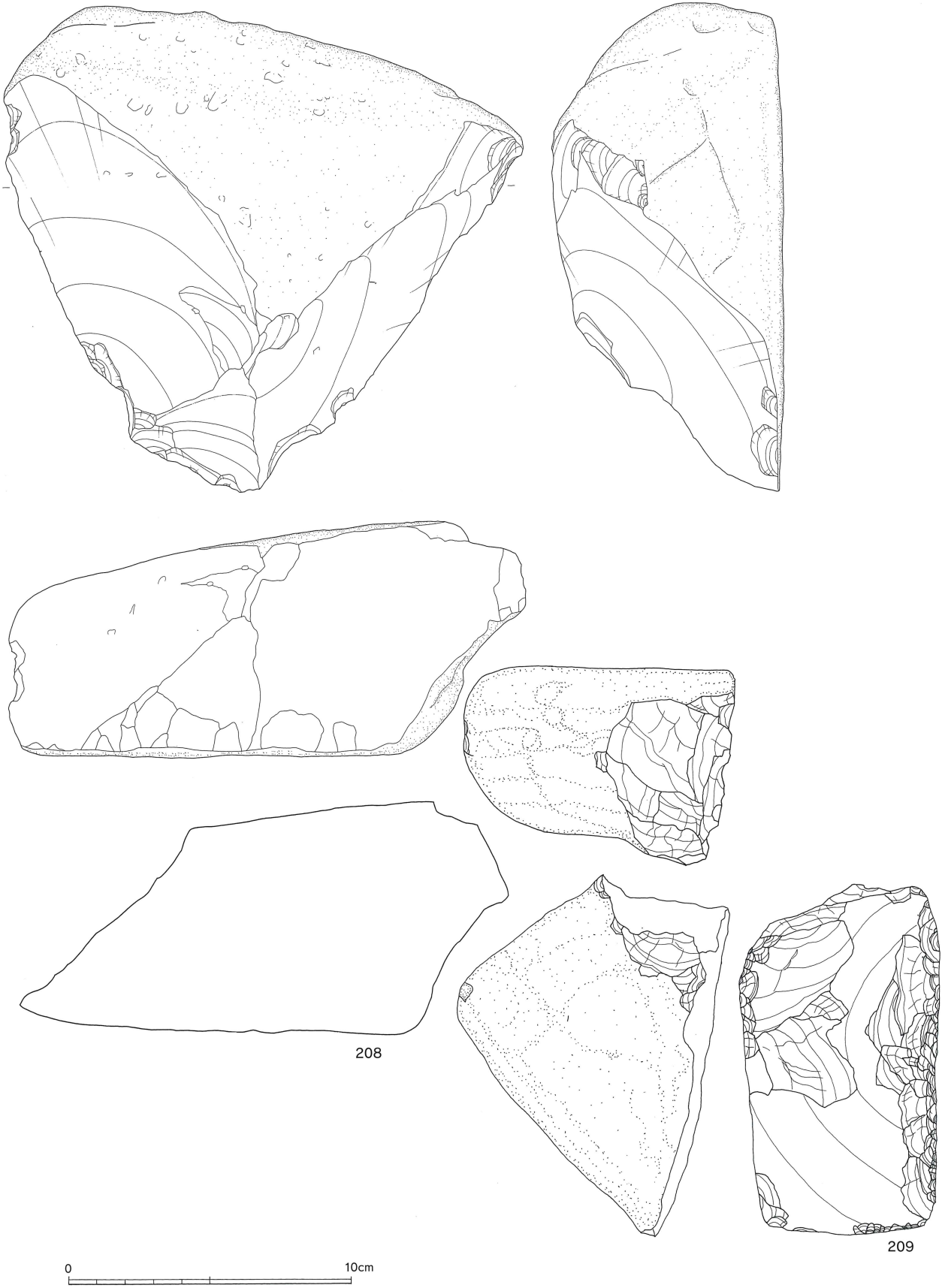


205

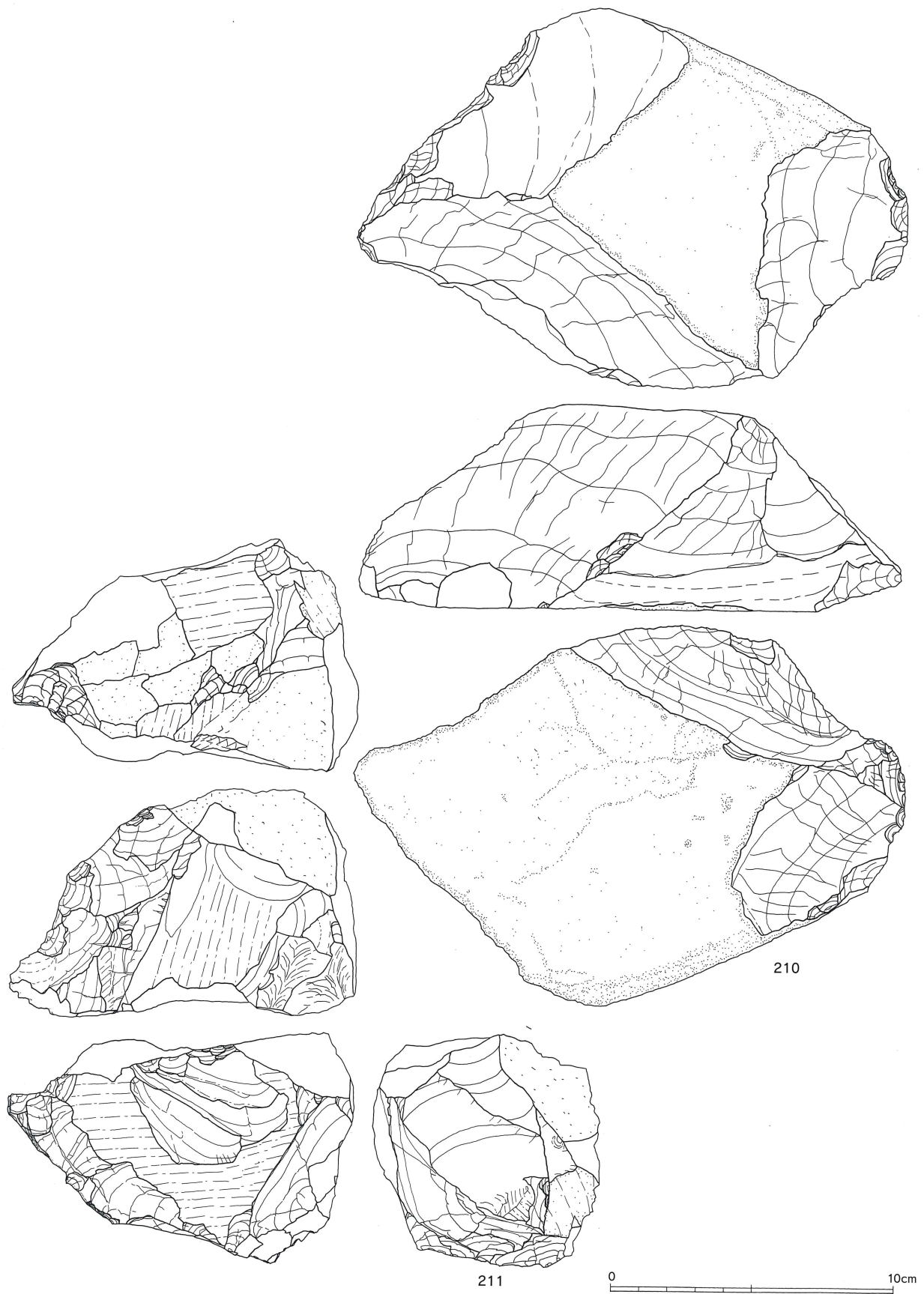
第35図 井ノ上 縄文早期遺物の実測図(31)



第36図 井ノ上 縄文早期遺物の実測図(32)



第37図 井ノ上 縄文早期遺物の実測図(33)



第38図 井ノ上 縄文早期遺物の実測図(34)

A3類 楕円形礫の片側もしくは両側を折り取るか、細長礫を割取り、端部に剥片剥離を加え直線的で片刃の刃部を作出した例(第32図196～第33図199,第34図202,第35図205)。このうち一例は半裁面を表裏の両面方向から両極剥離状に細かい剥離を加えている(第33図199)。

B類 楕円形礫か、楕円形の半裁礫の湾曲した周縁部に急角度の剥離を加え、片刃の刃部を作出した例(第27図184,第28図187～第31図193・第34図200)。線条痕や磨痕が観察される例を転用した例がある(第31図193)。

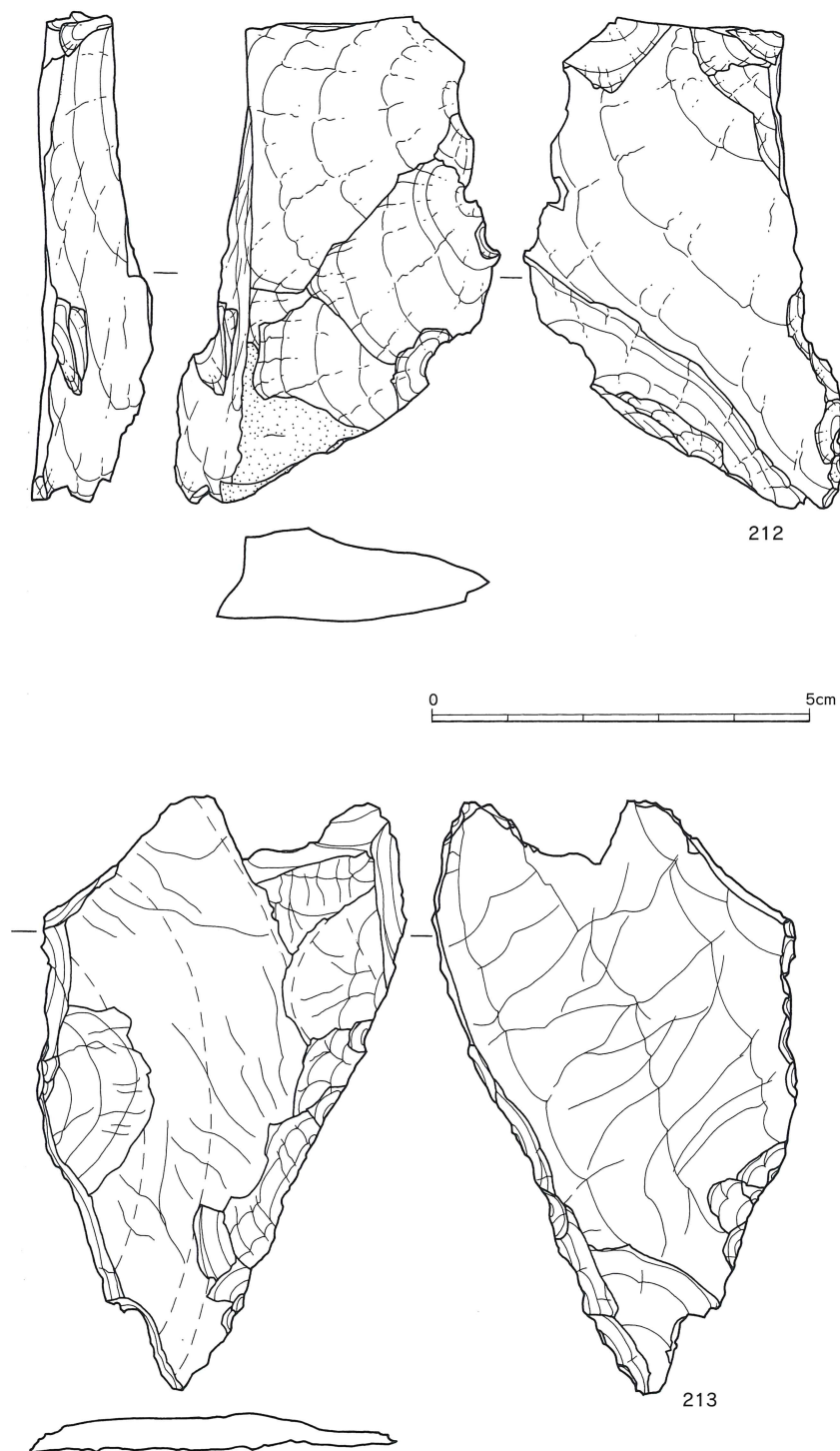
C類 楕円形で扁平な形に整形しているが、最も特徴的ことは両面を両刃状に剥離を加え、半円形で両刃の刃部を作出した例(第31図195,第34図201)。あるいは石斧的な用途を有する礫器か。

D類 方形または石鱗形を呈しており、小さく簡単な剥離で直線的な刃部を作り出した例(第31図194,第34図203,第36図206)。

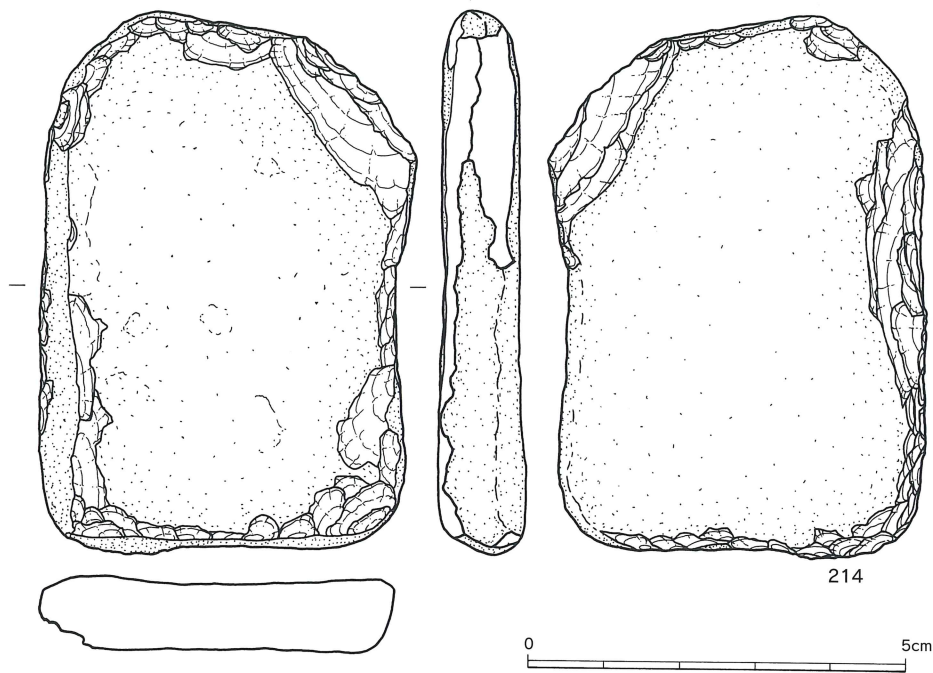
その他 角の取れた角礫を半裁し、半裁面を表裏の両面方向から両極剥離状に細かい剥離を加えた(第37図209)。この技術はA3類の中にも一例観察されるが(第33図199)、本例には刃部と考えられる部分が見当たらない。また扁平で長方形の例が1例あり、表裏の周縁沿いに細かい剥離痕が観察される他は礫面である(214)。本例は明瞭な鋭い刃部を有しておらず、あるいは敲石的な調査具か。

15 割石

割石は井ノ上遺跡の縄文時代早期のなかで石器として最も多い礫器より多い221点を占める。割石の特徴は様々であるが、礫器と同じ石を用い、若干の小剥離もあるが、何のための剥離痕であるのか明確な意図が窺えない石を割っただけのもの



第39図 井ノ上 縄文早期遺物の実測図(35)



第40図 井ノ上 縄文早期遺物の実測図(36)

であり、むしろ半裁・割るなどの痕跡が著しい。したがって形態的な特色が見出せない(第36図207,第37図208,第38図210)。礫器と同じく、大きさとその量から圧倒的な存在感である。やはり主要な生業に直結する石器と推定される。おそらく礫器の未成品である可能性もあるが、はっきりしない。割れ痕の程度は、かなり多いものから、1回だけの事例もある。